

伊勢国分寺跡 7



2009年3月

鈴鹿市考古博物館

伊勢国分寺跡 7

2009年3月

鈴鹿市考古博物館

例言

1 本書は、国庫・県費補助事業として鈴鹿市が2008(平成20)年度に実施した史 伊勢国分寺跡 史跡等・登録記念物保存修理 事業にかかる伊勢国分寺跡(第35次)の発掘調査概要報告書である。

2 発掘調査は以下の体制で実施した。

調査組織 鈴鹿市(市長 川岸光男)

調査指導

(国史跡伊勢国分寺跡保存整備検討委員会)

伊藤久嗣(鈴鹿市文化財調査会委員, 元三重県立博物館長)

内田和伸(奈良文化財研究所文化遺産部景観研究室長)

加藤二三子(元鈴鹿市青少年育成市民会議会長)

桐生明光(国分町自治会長)

桐生悦夫(元河曲地区青少年育成町民会議会長)

箱崎和久(奈良文化財研究所都城発掘調査部遺構研究室主任研究員)

橋爪貴子(NPO 法人五十鈴塾理事)

八賀 晋(三重大学名誉教授)

林 紘(博物館サポーター)

渡辺 寛(皇學館大学教授)

(伊勢国府跡発掘調査指導委員会)

八賀 晋(三重大学名誉教授)

伊藤久嗣(鈴鹿市文化財調査会委員, 元三重県立博物館長)

内田和伸(奈良文化財研究所文化遺産部景観研究室長)

川越俊一(前奈良文化財研究所都城発掘調査部長)

金田章裕(大学共同利用機関法人人間文化研究機構長)

和田勝彦(前東京純心女子大学事務局長)

渡辺 寛(皇學館大学教授)

調査担当 鈴鹿市考古博物館

(組織及び構成)

鈴鹿市考古博物館長

中森成行

主幹兼埋蔵文化財グループリーダー 藤原秀樹

埋蔵文化財グループ副主幹 新田 剛・浅野隆司

主査 田中忠明

事務職員 田部剛士・吉田隆史

嘱託職員 伊藤 洋・下津菜な子

臨時職員 加藤利恵・永戸久美子・別府智子・前出みさ子・横内江里

3 調査を実施した箇所は以下のとおりである。

三重県鈴鹿市国分町字堂跡 299 番外 2,082㎡

4 調査期間は、平成20年7月14日から平成21年3月10日までである。

5 現地調査と本書の編集執筆は、上記埋蔵文化財グループ員及び吉田真由美(管理企画グループ嘱託職員)の補助を得ながら新田が担当した。

6 現地の手作業は、社団法人鈴鹿市シルバー人材センターに委託した。参加者は以下のとおりである。

伊藤和代・川喜田日支子・勝野春男・清原宏・田中重治・中川征次・永戸尚子・

橋寺秀彦・林紘・吉岡健次

7 遺構及び遺物の記録には、過去の調査との整合性を図るため日本測地系(第VI系)を用いた。

8 遺物の取上げに際しては、上記座標による3mグリッドに基づき実施した。グリッド名称は、北西隅を基

準に X 軸ならびに Y 軸の整数下 3 ケタを組み合わせたものとした。さらに必要に応じて、3 m グリッドを 1 m グリッドに細分し、これらの 9 区画には北西を起点として西から東へ A ~ I の記号を付与して区別した。

例) $X = -121228 \cdot Y = 51786$ の場合・・・228・786

上記 3 m グリッド内の中央における細分グリッド・・・228・786・E

9 検出遺構は過去の遺構名を踏襲せず、今次の調査で新たに命名した遺構名を使用している。土層断面図における E・W・S・N の記号はそれぞれ東・西・南・北を表す。

10 掲載すべき遺構と遺物については本書の入稿期限の関係上掲載できなかったものがある。

11 本調査にかかる遺物・写真・図面は鈴鹿市考古博物館で保管している。

12 参考文献はまとめて第 V 章に掲載した。

13 現地調査に際しては、上記検討委員会および指導委員会の委員のほか下記の方々のお指導・御協力を得ました。記して感謝申し上げます。(敬称略・50 音順)

伊藤裕偉・小野健吉・鈴木克彦・野原宏司・穂積裕昌・山田猛・山中章・渡辺丈彦

目次

I	はじめに	1
II	史料と研究のあゆみ	1
III	調査の経緯	4
IV	遺構と遺物	5
1	遺構	5
	(1) 講堂	5
	(2) 小院・北東院	7
	(3) その他	8
2	遺物	8
V	まとめ	9
1	講堂	9
2	北東院	10

表目次

Table1	伊勢国分寺跡発掘調査履歴	2
Table2	伊勢国分二寺諸説	4

図版目次

- Plate1 関連遺跡位置図 1:200,000 / 伊勢国分寺跡周辺図 1:5,000
- Plate2 伊勢国分寺跡伽藍配置図 1:2,000 / 廻国碑拓影 1:10
- Plate3 伊勢国分寺跡平面図 1:1,000
- Plate4 講堂平面図 1:100
- Plate5 講堂瓦埴出土状況図 (北・東辺) 1:50
- Plate6 講堂瓦埴出土状況図 (東・南辺) 1:50
- Plate7 講堂瓦埴出土状況図 (南辺) 1:50
- Plate8 講堂瓦埴出土状況図 (西辺) 1:50
- Plate9 講堂土層断面図 1:40
- Plate10 小院・北東院平面図 1:200
- Plate11 小院・北東院土層断面図 1:40
- Plate12 北東院土層断面図 1:40
- Plate13 遺物実測図・拓影 (1) 1:40
- Plate14 遺物実測図・拓影 (2) 1:40
- Plate15 遺物実測図・拓影 (3) 1:40
- Plate16 遺物実測図・拓影 (4) 1:40
- Plate17 遺物実測図・拓影 (5) 1:40
- Plate18 遺物実測図・拓影 (6) 1:40
- Plate19 遺物実測図・拓影 (7) 1:40
- Plate20 遺物実測図 1:40
- Plate21 講堂全景 / 講堂東半
- Plate22 講堂南面 / 講堂南東隅
- Plate23 講堂南面 / 講堂南面東階段
- Plate24 講堂南面東階段 / 同
- Plate25 講堂南面中央階段 / 同
- Plate26 講堂南面 / 講堂北東隅
- Plate27 講堂東面 / 35-2 ~ 7 区小院・北東院
- Plate28 講堂調査前全景 / 講堂北面 / 同 / 講堂北面土層断面 / 講堂北面 / 講堂北東隅 / 講堂北東隅 / 同
- Plate29 講堂東面 / 廻国碑 / 講堂南面土層断面 / 同 / 講堂南面 / 同 / 同 / 礎石
- Plate30 講堂西面 / 同 / 35-5 区小院西辺 / 35-5 区小院内溝東辺 / 35-5 区小院内溝西辺 / 35-5 区小院内溝北辺 / 35-3 区小院東辺 / 同
- Plate31 35-2 区 / 35-6 区北東院西辺 / 35-9 区伽藍地南東隅 / 35-10 区伽藍地南西隅 / 35-13 区伽藍地北西隅 / 35-12 区伽藍地北東隅 / 35-11 区 / 35-14 区
- Plate32 土師器・須恵器・灰釉陶器・釘
- Plate33 軒丸瓦・軒平瓦
- Plate34 軒平瓦・文字瓦
- Plate35 文字瓦
- Plate36 文字瓦
- Plate37 文字瓦
- Plate38 文字瓦・平瓦・鬼瓦

表紙 大正12年建立の史跡標柱

裏表紙 台形埴

I はじめに

伊勢国分寺跡は大正 11 年 10 月 12 日内務大臣により国史跡に指定された。大正 8 年に施行された「史蹟名勝天然記念物保存法」に基づくものである。

伊勢国分寺における考古学的な発掘調査は昭和 63 年 (1988) に始まる。国・県の補助を得て、鈴鹿市教育委員会が調査主体となり、史跡の範囲確認調査として開始された。平成 2 年度 (1990) における第 3 次調査までの 3 カ年で一辺約 180m の築地塀に囲まれた伽藍地がほぼ明らかとなった。併せてこの年度から南院・北院と呼ばれる尼寺推定地の範囲確認調査が行われることとなり、以後史跡だけでなく、南院・北院も含めて調査次数を数えることとした。したがって、尼寺跡の可能性が高い国分遺跡 (北院) や白鳳期に遡る寺院であることがわかった南浦遺跡等 (南院) の調査も伊勢国分寺跡関連調査として取り扱っている。過去における調査の概略は Table1 のとおりである。

平成 7・8・9 年度には史跡の公有地化を果たし、平成 11 年度から 7 カ年をかけて史跡内部の調査を実施した。その結果、金堂・講堂・中門・回廊・南門など主要伽藍の位置や規模が明らかとなり、伽藍地内の北東部においては修造期に新たに設けられたと思われる区画施設が確認された。この伽藍地北東における区画施設は「北東院」と呼ばれている。その他、伽藍地内の北東部ならびに南東部からは大型建物が検出され、北東院の南からはさらに小区画 (「小院」) が発見された。北東院・小院の区画施設は築地塀と想定されており、北東部で見つかった大型建物は食堂と想定されている。

今回は、整備に先立つ最終的な確認調査として講堂基壇における基壇化粧のあり方、北東院および小院の新旧関係やその性格、伽藍地を画する築地の四隅確認を目的として調査に着手した。

II 史料と研究のあゆみ

伊勢国分寺に関連する史料は極めて乏しい。六国史では、『続日本紀』宝亀 6 年 (775) 8 月癸未条に「伊勢・尾張・美濃言さく、「九日に異常にある風雨あり。百姓三百餘人、牛馬千餘を漂没し、及国分併せて諸寺の塔十九を壊つ。その官私に廬舎は勝げて数ふべからず」とあり (黒板・森田編 2003)、『日本後紀』大同 6 年 (809) 閏 2 月辛丑条に「始めて志摩国の国分二寺の僧尼を遷して、伊勢国の国分寺に安置す」とある (青

木他校注 1995)。

宝亀 6 年 8 月癸未条は台風による被害報告で、同辛卯条にある大祓の実施からその被害が甚大であったことが窺われる。伊勢国分寺においても被害があったことが想定されるが、「塔十九」に伊勢国分寺の塔が含まれていたか否かについては不明確である。遡っては、天平神護 2 年 (766) 9 月戊午条に「比伊勢・美濃等の国の奏を見るに、風の為に損はるる官舎数多あり」 (黒板・森田編 2003) とあるのも同様の被災事例であるが、国分寺における被害の有無は記されていない。六国史以外では、『大神宮諸雑事記』に仁寿元年 (851) 8 月 3 日として災害関連の記事があり、「終日大風吹。洪水。即国内堂塔倒伏」とある。

大同 6 年閏 2 月辛丑条は志摩国分二寺の併合記事である。志摩国分寺の国分寺料は三代格天平 16 年 7 月 23 日詔によれば尾張国が充当することとなっていたが (黒坂 1936)、主税寮式では伊勢国及び三河国に修理志摩国分寺料として各 3 千束が設定されている (虎尾編 2007)。いずれにせよ志摩国分寺が隣国に経済的基盤を有するものであったことが知られる。

中世以降、伊勢国分寺の消息は不明となるが、国分寺領の状況を示す史料としては「皇太神宮建久已下文書」や「京都御所東山御文庫記録」がある。前者では、山邊御菌の項に国分寺領の記載があり、後者は法勝寺領として伊勢国分寺が見える。

山邊御菌は、給主散位大鹿国忠、永承年中 (1046 年頃) の建立と伝えられ、承安元年 (1171) に宣旨を受けたと記されている。「当御菌内大鹿村号国分寺領申下院宣之間」とあり、神宮領でありながら国分寺領としての院宣を受けた (仲見編 1980)。ちなみに大鹿国忠は『吾妻鏡』に惣大判官代としてその名が見える。大鹿氏は、『古事記』敏達天皇条に「伊勢の大鹿首の女、小熊子郎女を娶して」とあり (倉野 1963)、『日本書紀』敏達天皇四年正月是月条に「伊勢大鹿首小熊が女を菟名子の夫人と曰ふ」とあり (坂本他 1995)、『延喜式』神名帳河曲郡 20 座に大鹿三宅神社があることから (虎雄編 2000)、古代河曲郡の豪族と考えられている。『続日本紀』天平勝宝元年 (749) 甲午朔条に「治め賜ふべき人」として伊勢大鹿氏があげられており、こちらも同族と見られる。国分寺所在郡の有力氏族として国分寺造営に関与した可能性が考えられ (岡田 1995)、古代末にはその後裔が在庁官人の地位を占めることとなるが、大鹿国忠を最後に同一族は史上から姿を消す。「京都御所東山御文庫記録」は、尼浄真なるものが乾元 2 年 (1303) の関東下知状を帯びて、何事かを後宇

Table 1 伊勢国分寺跡発掘調査履歴

次数	調査年度	遺跡名	調査期間	面積㎡	調査原因	概要
1次	1988	伊勢国分寺跡	880920～881215	450	学術	国分寺築地・掘立・竪穴
2次	1989	伊勢国分寺跡	891002～891219	470	学術	国分寺築地
3次	1990	伊勢国分寺跡	901011～901223	352	学術	竪穴・掘立柱建物・国分寺南門・築地
		南浦遺跡		150		掘立柱建物
4次	1991	伊勢国分寺跡	911002～911225	80	学術	土坑
		南浦遺跡		545		瓦溜・掘立柱建物
5次	1992	南浦遺跡	920907～921105	200	学術	大鹿山6号墳・瓦溜
		国分南遺跡		80		溝
6次	1993	国分西遺跡	930913～931124	338	学術	瓦溜・鬼瓦
		国分遺跡		19		柱穴
		伊勢国分寺跡		142		溝
7次	1994	伊勢国分寺跡	940523～940731	3,500	博物館	大型掘立柱建物
			941201～950131			掘立柱建物・古墳周溝
8次	1994	国分遺跡	940801～941030	300	学術	尼寺北限溝・鬼瓦・瓦塔
		国分西遺跡		8		なし
9次	1994	伊勢国分寺跡	950105～950228	1,200	博物館	掘立柱建物(倉庫)・掘立柱塀
10次	1995	狐塚遺跡	950803～951016	880	学術	掘立柱建物(郡衙正倉)・竪穴住居・古墳周溝
11次	1995	伊勢国分寺跡	950510～950728	1,200	博物館	溝・土坑・掘立柱建物
12次	1995	狐塚遺跡・伊勢国分寺跡	950626～960111	2,170	博物館	掘立柱建物
					(進入路)	掘立柱建物・竪穴
13次	1996	伊勢国分寺跡	960415～970306	3,100	博物館	掘立柱建物
		狐塚遺跡			(進入路・駐車場)	大型掘立柱建物
14次	1996	伊勢国分寺跡	960605～961002	850	博物館	溝・土坑
14-2次	1996	国分遺跡	970221～970221	12	寺院	土坑・灰釉陶器
15次	1996・1997	伊勢国分寺跡	970307～970425	650	博物館	溝・掘立柱柵
16次	1997	国分南遺跡	970424～970531	1,140	ビニールハウス	掘立柱建物・鋳造遺構
17次	1997	南浦遺跡	970617～970816	830	ビニールハウス	掘立柱建物・鬼瓦
18次	1997	伊勢国分寺跡	970918～971204	680	博物館(外周道路)	掘立柱建物(川曲郡衙正倉)
19次	1997	伊勢国分寺跡	970929～980214	3,000	農地造成	掘立柱建物・中世墓・古墳
20次	1997	狐塚遺跡	980304～980316	90	土地造成	掘立柱建物

21次	1998	狐塚遺跡	980805～980809	1,129	農地造成	竪穴・掘立
22次	1999	伊勢国分寺跡	990715～990930	153	学術(市単)	国分寺講堂
23次	1999	伊勢国分寺跡	000204～000331	132	学術(市単)	国分寺講堂
24次	2000	伊勢国分寺跡	000508～000919	216	学術(市単)	国分寺講堂・金堂
25次	2001	伊勢国分寺跡	010514～011031	1,100	学術(国補)	国分寺中門・回廊・
			020207～020312			国分寺南門・竪穴・掘 立柱建物
26次	2001	国分西遺跡	010703～010704	16	個人住宅	土坑・溝
27次	2001	国分西遺跡	020115～020131	98	個人住宅	土坑・掘立柱建物・溝・ 鑄造関係遺物
28次	2002	伊勢国分寺跡	020509～030228	1,891	学術(国補)	国分寺南門・築地・大 型掘立柱建物
	2003	伊勢国分寺跡	030804～040312	2,374	学術(国補)	国分寺僧坊・北門・大 型掘立柱建物・築地
30次	2004	伊勢国分寺跡	040723～050128	1,100	学術(国補)	国分寺僧坊・築地
31次	2005	伊勢国分寺跡	050728～051209	1,022	学術(国補)	国分寺小院築地塀・門
32次	2007	国分遺跡	070418～070511	120	個人住宅	掘立柱建物・溝
33次	2008	伊勢国分寺跡	071031～071116	123	市道改良	溝・柱穴
34次	2008	国分遺跡	080523～080529	80	個人住宅	土坑・溝・柵列・柱穴
35次	2008	伊勢国分寺跡	080714～090227	2,082	学術(国補)	国分寺講堂・北東院・ 小院・築地塀
合計				34,072		

多院庁に訴え、徳治3年(1308)8月11日に上皇が決裁したとするものである(奥野1956・阿部1986)。詳細は不明であるものの、鎌倉末期には院の庇護を受けることとなった。

近世以降になると、伊勢国分寺は次第に学究の対象となり、ふたたび史料に登場するようになる。『勢陽雑記』・『三國地誌』・『勢陽五鈴遺響』など地誌類にその旧跡の記載や考証が見られ、『三國地誌』の協力者である萱生由章が明和8年(1771)に著した『常慶山國分寺縁起』には史跡指定地に相当する部分の具体的な描写がある。例えば、遺跡の旧状を知る上で参考となる次のような一節がある。

「・・・明暦の頃山中某此國の雜記をなむあつめけるとき、今の草茅に國分常慶山の名くはし□□ありけむ。此所より五六町も野路をこし、かい道よりはひがしよりに、昔の寺跡とて廻りおよそ六百歩ばかりのくうちあめり。大門鐘樓門そとは谷などいへるところ、生そふ草のそこそここのこり、つのはふいしずゑのあと、つかきのおもかけ、菜花開くところ、遺基を認むと、古人のいひしもかゝることにして、岡には寒兔のはしるあり、谷には暮鴉うゆるあり、たゝのこれるものは、つちくれにまじるかはらやうのものにして、あるは菊あるはさくらのまたからぬすがたも、今めかしからず。また師子取石とて、七八人かほども膝をいるゝ怪岩あり、靈おほきこと口碑にのこ

りてけるをおもへば、まぎれぬ佛取岩と見へたり。さて池めいてくぼまり夏ふゆ水のつける處あり。是は開士大ぼさつの咒水の跡なりなどいひのゝしれり。又一もとのさくらあり。是は天平のそれのとし、みかど此所にみゆきましませし、行殿の跡にして、その階前にみ手づから植させ給ふとて、王城のさくらといふ。・・・是よりきたひがし、すこしうちのぼる處に天神谷とてかむさびたるは山あり。そこに天神のみやしるあり。是伽藍の神なるよしをいひ傳ふ。・・・いまいし薬師のひがしなる、山のかよりに般若谷てふところあり。こゝなる人の説に、此山に古墳破冢おほく、かゝる地名もありけるは、そのかみ國分寺のおくつきどころなりしよしをいふにつけて思ふに、此谷國分にむかふて遠からず侍れば、二季ことにはんにや會を行ひし故に、かく名を傳へしもしらず。・・・」

鈴木敏雄氏によりこの縁起が引用された昭和11年段階において、由章が記した礎石や築地塀跡の多くは失われ、かつて見られたという多量の埴も稀少となり、師子取石に至っては口碑にも存在しないという(鈴木1936)。この縁起のなかで最も注目されるのは「師子取石」で、想定される穴の大きさにはやや疑念が残るものの、柄穴式の塔心礎を思わせる。

由章の縁起と並んで、伊勢国分寺の来歴を説くものに花木山光福寺境内の「伊勢國分寺陳跡碑記」(鈴木1936)がある。一身田の僧眞淳の撰になる享和2年

Table 2 伊勢国分二寺諸説

書誌名等	編著者	年		僧寺	尼寺	備考
勢陽雑記	山中為綱	明暦元年	(1655)	北院?	記述なし	常慶山国分寺…国分村にあり…古瓦世に用ひて為硯云々
三國地志	藤堂元甫	宝暦13年	(1763)	堂跡	伊勢寺を否定	
常慶山国分寺縁起	萱生由章	明和8年	(1771)	堂跡	伊勢寺	
伊勢国誌	山田安在	天明年間	(1781 ～ 1788)	北院?	記述なし	鈴鹿郡…国分山金光明寺 国分村…當国ノ国分寺是ナリ
伊勢国分寺陳跡碑記	眞淳	享和2年	(1802)	南院	北院	
勢陽五鈴遺響	安岡親毅	天保4年	(1833)	北院	伊勢寺	六十余州同国ノ行者納経所トス
伊勢式内神社檢録	御巫清直	明治11年	(1878)	北院	堂跡	
伊勢名勝志	宮内黙蔵	明治22年	(1889)	北院	伊勢寺	明治十七年堂宇ヲ再建セリ近傍土中ヨリ往々古瓦ヲ出スコトアリ
三重県風土史蹟	大森孤舟	大正5年	(1916)	北院	伊勢寺	常慶山國女寺 同所ニアリ舊、金光明寺トイフ
三重縣古瓦圖録	鈴木敏雄	昭和8年	(1933)	堂跡	南院	
史蹟伊勢國分寺址	鈴木敏雄	昭和11年	(1936)	堂跡	南院	『三重縣に於ける主務大臣指定史蹟名勝天然記念物』第一冊史蹟所収
伊勢國分寺	佐藤虎雄	昭和13年	(1938)	堂跡	北院あるいは南院	『國分寺の研究』所収
伊勢国分寺	仲見秀雄	昭和55年	(1980)	堂跡	南院?	『鈴鹿市史第1巻』所収
伊勢	佐藤虎雄	平成3年	(1991)	堂跡	北院あるいは南院	『新修国分寺の研究第二卷畿内と東海道』

(1802) 建立の石碑で、「金光明寺稱南院法花寺稱北院」と記されている。北院は光福寺や常慶山国分寺がある国分町の集落密集地で、南院は白鳳寺院の存在が想定される南浦遺跡付近（大鹿廃寺）である。同碑によれば光福寺の寺名は「金光明福于國家之謂也」に由来し、本堂には南院の法灯を継ぐものとして神戸侯本多忠裔が寄せた「南院」の額が掲げられている。由章の縁起が記す堂跡付近について全く触れられていないのが特徴となっている。

こうした近世における国分寺の考証はやがて近代以降の郷土史家に受け継がれる。たびたび議論のあった二寺の位置についてはTable2のとおりまとめることができる。本格的に伊勢国分寺跡の調査が開始された昭和63年頃ほぼ定説化され、あるいは現代においてもしばしば耳にされる「尼寺＝南院説」は鈴木敏雄氏による昭和11年の報告が大きな影響を与えていると思われる。

Ⅲ 調査の経緯

発掘調査区はおおむね座標に基づき設定することと

したが、一部旧地割に従ったところもある。基本層序は旧耕作土に由来する表土と段丘堆積層に二分される。後者はいわゆる地山で、地山上面が遺構検出面である。表土の掘削は機械と人力を併用し、遺構掘削は必要最小限に留めた。調査後の埋め戻しには、遺構の保護と遺物取り上げによる減少部分の補充を兼ね、山砂を用いた部分もある。

以下、調査日誌の抄録を記し、調査経過とする。

調査日誌抄録

平成20年

- 7月14日 講堂の雑草除去、表土掘削開始。
- 7月16日 講堂北面で埴列検出。
- 7月31日 講堂東面で瓦列検出。
- 8月1日 学芸員館務実習生参加。
- 8月4日 講堂上面精査。礎石痕跡の検出ならず。
- 8月5日 講堂南面で埴列と瓦列確認。
- 8月8日 講堂東面の写真撮影。
- 8月12日 講堂東・南・北の瓦埴実測開始。
- 8月18日 小院・北東院表土掘削・遺構検出開始。
- 8月21日 35-2区で小院北限に当たる可能性のある土器・瓦溜検出。

9月3日 35-2区北辺に雨水除去のためのサブトレンチ掘削。

9月10日 35-5区で小院・北東院関連の溝検出。

9月11日 35-5区で小院内の南北溝2条確認。

9月17日 35-4・5・6区の小院・北東院関連溝にサブトレンチ設定。

10月6日 国史跡伊勢国分寺跡保存整備検討委員会開催。

10月9日 土坑SK08016遺物出土状況実測開始。

10月16日 講堂南面中央部分の調査区を拡張。

10月17日 講堂周囲の瓦取上げ開始。

10月29日 講堂南面中央付近で階段基礎確認。

11月4日 講堂西面に調査区設定，表土掘削開始。

11月10日 講堂南面東寄りで階段基礎確認。

11月11日 市立神戸中学校生徒職業体験で調査に参加。

11月17日 伊勢国府跡指導委員視察。

11月18日 35-9区（伽藍地南東隅）・35-10区（同南西隅）の遺構検出。

11月25日 講堂南面東階段の西辺確認。

12月1日 講堂南面中央階段東辺確認。35-11区（経蔵・鐘楼推定地）表土掘削。

12月4日 講堂南面の写真撮影。

12月14日 35-3区SD08024瓦出土状況実測開始。

12月16日 空中写真撮影。

12月20日 35-4区SK08014・015瓦出土状況実測開始。

平成21年

1月6日 小院・北東院土層断面実測開始。

1月7日 小院・北東院遺構実測開始。

1月14日 35-4区SK08014・015遺物取上げ開始。

1月15日 35-3区SD08024遺物取上げ開始。

1月16日 講堂南面瓦塼のレベル記録。

1月20日 講堂南面瓦を一部取上げ。35-12区（伽藍地北東隅）表土掘削開始。

1月24日 35-13区（伽藍地北西隅）表土掘削開始。

2月5日 35-14区表土掘削開始。

2月12日 35-15区表土掘削開始。

2月18日 35-16区設定。

IV 遺構と遺物

1 遺構

(1) 講堂（SB08001）

瓦塼列（以下単に瓦列とする）や台形塼からなる塼

列が基壇周囲から検出された。講堂の基壇化粧もしくはその地覆にあたるものと考えられる。台形塼とは断面が台形となる塼である。以下の記述では、台形塼の最も広い面を下底面と称することにする。台形塼の法量は、個体によって変異があるが、22次調査出土の完形資料では長軸373mm，下底面幅122mm，下底面を下に配した際の器高94mm，重さ6kgである。

塼列外縁を基準にした講堂基壇の南北規模は21.2mで、同じく東西規模は、瓦列・塼列を基準にして33.2mである。したがって1尺を0.296mほどとすると、南北が72尺，東西が112尺ほどということになる。塼列北辺の角度はN 91.5° W，同じく南辺はN91.3° Wであるので、講堂基壇中軸の傾きはおおむねN 1.4° Wである。

南面からは階段基礎と思われる張出部分が検出されたが、東面では確認できなかった。

基壇上には礎石が4点存在し、いずれも花崗岩と思われる。2点は長軸を天地とした立石で、うち1点は寛保3年の銘を有する廻国碑に転用されている。他2点については下部の状況を確認したが、根石や掘方は確認されなかった。

廻国碑は、地上部の高さ0.72m，幅0.34m，厚さ0.21mで、やや西に傾いている。「寛保三癸亥天\奉納大乘妙典日本回國諸願成就供養敬白\八月十三日願主玄空（\は改行）と記されている。1行目「天」の前には不鮮明な部分があり、さらに1文字あるかもしれない。

根石に使用されたとと思われる径30cm内外の石も随所に散在し、集中する地点もあるが、これらも原位置を保つものはない。近年スギを植樹した際に、周囲に集められたと思われる部分も見られる。

基壇東辺付近には浅い瓦溜SX08005がある。埋土にしまりがなく、後世のものと思われるが、時期は特定できない。基壇中央やや西に位置する溝SD08025は地境の溝で、この溝より西では大きく基壇が失われ、この溝の掘削によって塼列のうちの1個体が失われている。

講堂北辺（Plate5）

台形塼15点からなるのべ石状の塼列が検出された。すべて下底面を外側に向けているが、下底面を中心に風化や欠損の見られる個体が多い。

1・2は2段目がほぼ原位置をとどめて検出された部分で、1段目と同様に下底面を外側に向け、1断面とは長軸方向に半個体分ずらして配置されている。1段目以上に劣化が著しい。

3は2段目と思われる資料で、隣の4と接する側を欠損している。やや外側にずれているものの、原位置からの移動はわずかと思われる。下底面を内側に向けている。

4は2段目が外側に転落したもので、下底面を下に向けている。元は1段目同様下底面を外側に向けて配置されたことが覗える。

5・6はいずれも下底面を下に向けている。3・4とは水平方向のずれが認められず、並列する。

一段目の埴列上面の標高は埴7で44.46 m、同じく8で44.49 mを測り、ほぼ水平に配置されている。直近のサブトレンチ01における掘込地業の深さは、7上面から0.3 mで、同じく遺構面までの高さは0.3 mである。埴の裏込め土と基壇北辺埋土との区別はつかなかった。

9は台形埴の上で検出された平瓦で、凹面を上に向けている。南側から転落した可能性もある。

10・11は埴列の内側に配された瓦列である。10は丸瓦、11は平瓦で、ともに短軸端を基壇外側に揃え、凸面を上に向ける。

12～14は台形埴で、基壇外縁から0.3～0.4 m内側に配される。いずれも下底面を下に向ける。12～14を上成基壇に関わるものとすれば、8～14からなる基壇北東隅は二重基壇である可能性を示すものである。

講堂東辺 (Plate5・6)

北寄りの一部と南東隅付近に埴列が検出され、中程から南端にかけて瓦列が検出された。

15から16までの欠損資料を含む6個体の台形埴は全て下底面を外側に向ける。台形埴上面の標高は15で44.45 m、16で44.39 mであり、南に向けて下降する。南端の20・21より0.1 m強ほど基壇内側に配される。

20・21は台形埴で、下底面を外側に向ける。北寄りで検出された15・16などと比較すると、整然と配置されている。21上面の標高は44.35 mで、16よりわずかに低い。

瓦列には様々な製品が用いられている。丸瓦や平瓦は直軸端・短軸端を基壇外側に揃えている。17・18は軒丸瓦Ⅱ G01型式で、瓦当面を外側に向けている。19は台形埴で、下底面を下に配されるが、その下には丸瓦や平瓦が配されている。丸瓦22は、台形埴21の直上において縁辺をほぼ一致させるように配されている。

講堂南辺 (Plate6・7)

台形埴51個体からなる埴列が検出された。31・39・40・43が下底面を上に向けている以外はすべて下底面を外側に向けている。43より西にはまったく埴列が残らない。

東端の台形埴23は東辺南端の台形埴21の長軸端面と下底面を揃えて配されている。台形埴上面の標高は、東端の23が44.35 m、西端の43が44.17 mで、0.2 m弱の高低差がある。

瓦列は断続的に認められ、おおよそ埴列と平行するが、埴列との平面的な位置関係は微妙に異なる。外側の縁辺を比較すると、丸瓦24と台形埴23では0.15 m、平瓦26と台形埴25では0.19 m、丸瓦30と台形埴29では0.29 m、平瓦33と台形埴32とでは0.26 m、方形埴34と台形埴36では0.23 m、平瓦42と台形埴41では0.12 m、平瓦44と台形埴43では0.14 m離れる。つまり、埴列と瓦列の間隔が東端では狭く、東階段と中央階段の間では広い。

瓦列相互の標高にも差が見られる部分がある。平瓦45で44.42 m、平瓦26で44.41 m、平瓦28で44.43 mと南東隅から東階段にかけてはほぼ水平であるが、軒平瓦46が44.35 m、平瓦47が44.36 m、同じく48が44.31 m、33が44.35 mとなり、東階段から中央にかけてやや低くなる。方形埴34から台形埴35までは一段高くなり、34で44.47 m、35で44.51 mを測る。平瓦38から再び低くなり、38で44.34 m、平瓦42で44.27 m、同じく44で44.36 m、軒平瓦49で44.40 mである。50は方形埴の破損品で、瓦列に混在している。

講堂南辺東階段 (Plate7)

階段の基礎部分と思われる埴列が確認された。平面規模は芯々で、南北1.8 m、東西2.05～1.95 mである。角度は東辺がN-1° W、南辺がN92.8° W、西辺がN3.2° Wで、南辺及び西辺が不整形である。すべて台形埴が使用されており、東辺の55から56までと南辺の57から58までは下底面を上に向けて、段差を生じることなく、5点の埴が整然と配列されている。標高は55が44.23 m、56が44.21 mでわずかに南へ傾斜する。58の上にはやや北へずらして59が配されるが、風化が著しいため、設置方向は判然としない。

西辺では、南端の61以外は長軸端を欠き、下底面の方向は一定しない。上面の標高は、60が44.26 m、61が44.18 mで、南に傾斜する。埴の周囲には瓦片が多く含まれている。

サブトレンチ18における土層断面では、基壇本体

よりも外側に基礎地業が広がり、足場の抜取痕と思われる穴を断面検出した。階段部分の塼より下は瓦片の混入が少ない。

講堂南辺中央階段 (Plate7)

東階段と同様、基礎部分にあたる。平面規模は芯々で、南北 1.8 m、東西 1.95 m である。東辺が N1.2° W、南辺が N91.1° W、西辺が N0.9° W である。

東辺はすべて、下底面を外側へ向け、やや整然とした配置を示す。上面の標高は、62 が 44.19 m、63 が 44.16 m で、わずかに南へ傾斜する。

南辺も下底面を外側へ向ける。64 から 65 までの間に 4 個分の欠落がある。65 の西にはさらに西辺の塼列を越えて 66 が続く。

西辺は、すべて下底面を上に向けるが、長軸端を欠き、点数が東辺と同じでありながら、辺長が短い。上面の標高もまちまちで、67 が 44.2 m であるのに対し、68 は 44.1 m と、0.1 m の開きがある。

講堂西辺 (Plate8)

西辺においては延石状の塼列は検出されず、瓦列のみが確認された。台形塼 51 ~ 53 は瓦列中に混在して使用されたもので、52・53 は外側に移動している。54 は軒平瓦の瓦当面向外側に向けて配されている。型式未設定の資料で、飛雲文状の文様を持つものである。

(2) 小院・北東院 (Plate10)

小院関連の遺構は 35-3・4・5・7 区で検出され、北東院関連の遺構は 35-3・4・6 区で検出された。

SA08046・SD08024・08047

SA08046 は小院東辺の築地塼である。SD08047 は SA08046 外側の溝で、SD08024 は内側の溝である。35-5 区の東南端と 35-3 区の一部において確認された。SD08024 と SD08047 の間隔は内法で 2.7 m ほどである。SD08024 は幅 1.0 ~ 1.8 m、SD08047 は幅 1.3 m である。SD08024 は 35-3 区で北東院の溝 SD08026 に切られているが、途中で深さを減じ、35-5 区まで連続しない。SD08024 の角度は N1.7° W である。

SD08047 は 35-3 区では確認されないが、同区の瓦溜 SX08010 の一部が SD08047 の延長部分に相当する可能性もある。同様に 35-2 区においては瓦溜 SX08034 があり、小院の北限に対応する可能性がある。サブトレンチ 14 では、SX08034 の断面観察を行ったが、小院の北限と断定できる材料は得られなかった。溝埋土には多くの瓦を含んでおり、SD08024 からは鬼瓦 (Plate20 No. 52) や軒瓦・文字瓦などが出土した。

SA08045・SD08040・08041

SA08045 は小院西辺の築地塼である。SD08040 は SA08045 内側の溝で、SD08041 は外側の溝である。SD08040 と SD08041 との間隔は内法で 2.6 m である。SD08040・08041 は 35-4 区にも続くことが予想されたが、北東院関連の溝 SD08008・08009 との重複関係は明らかにできなかった。SD08041 の幅は 0.6 m 以上、SD08040 の幅は 0.5 ~ 0.8 m であるが、上面は後世の溝 SD08006・08020・08007 などによって大きく損なわれている。ともに瓦片を多く含む。

SD08019・08018・08038

小院内の溝で、第 31 次調査の SD05019 や第 28 次調査の SD0289 などとともに断続的ながら方形にめぐらされる。幅は 0.6 ~ 1.7 m で、深さは SD08018 で 0.61 m、SD08019 で 0.46 m である。35-3 区北西部分や 35-4・7 区では非常に残りが悪く、埋土は数 cm を残すのみである。埋土はややしまりがないのが特徴で、瓦片を含む。角度は SD08038 が N90.9° W、SD08018 が N1.3° W、SD08019 が N1.2° W ほどである。

SA08043・SD08008・08009

SA08043 は北東院西辺の築地塼である。SD08009 は想定される築地 SA08043 外側の溝で、SD08008 は同じく内側に位置する。2 条の溝に挟まれた部分の幅はおおよそ 2.6 m である。SD08009 は幅 1.3 m 以上で、西辺は SD08022 に切られる。SD08008 は幅 0.2 ~ 2.0 m・深さ 0.43 m である。SA08043 の角度は N0.2° W である。

SA08043 が想定される部分では、不整形の土坑 SK08014・08015・08016 が検出され、うち SK08014・08015 は SD08009 に切られる。

SK08014・08015・08016 からは瓦類のほか、土器類も出土しており、SK08015 からは須恵器坏蓋 (Plate13 No. 5・8) が、SK08016 からは土師器皿 (Plate13 No. 1)・把手付甕 (同 No. 2)・須恵器薬壺蓋 (Plate13 No. 10) が出土している。

SA08044・SD08026・08048

SA08044 は北東院南辺の築地塼である。SD08026 は SA08044 外側の溝で、SD08048 は同じく内溝である。SD08048 は SD08037 に、SD08026 は SD08049 に切られる。SD08026 は幅 1.8 ~ 2.6 m・深さ 0.64 m、SD08048 は 0.5 ~ 1.4 m である。SD08026・SD08048 に挟まれた部分の幅は内法で 2.6 m ほどである。SA08044 の角度は N90.7° W である。SD08026 からは瓦が多く出土した。

(3) その他

伽藍地四隅(35-9・10・12・13区)と鐘楼・経蔵推定地(35-11区)の調査を実施した。伽藍地四隅については従来の想定どおり確認できた。鐘楼あるいは経蔵が推定された講堂の南西方向に35-11区を設けたが、遺構は確認されなかった。

2 出土遺物 (Plate13～20)

出土遺物の大半は瓦類で、コンテナバットに200箱以上にのぼる。丸瓦は基本的に狭端が有段となるもので、ごくまれに無段のものが見られる。平瓦は一枚作りのものが大部分を占め、ごくまれに桶卷技法によると見られるものがある。丸瓦・平瓦ともに、国分寺創建よりも古い時期に製作された瓦がわずかにもちこまれているためと考えられる。軒丸瓦は横置型一本作り、軒平瓦は一枚作りである。土器類は講堂よりも北東院付近でより多く出土する傾向にある。国分寺存続期に属すると見られる土師器・須恵器・灰釉陶器のほか、国分寺創建以前の土器や廃絶後の土器・陶器なども少量見られる。以下主なものについて記述する。

1・2は35-4区SK08016出土。1は土師器皿で、口径206mm。口縁部はヨコナデされる。2は土師器把手付甕で、口径217mm・器高159mmである。

3は須恵器坏身で、35-3区SK08028・SD08029から出土した混入資料である。口縁部は内傾して、直線的にたががあり、口端部内面にかるうじて段を留める。

4～9は須恵器坏蓋で、10は同じく薬壺の蓋である。4はサブトレンチ12、5・8は35-4区SK08015、6・7は35-3区SX08010、9は講堂南面(SD08004)、10はSK08016出土である。4は口径134mm、5は口径123mmで、ともにやや丸みを帯びた天井部からわずかに屈曲し、垂下する口縁部を有する。6はやや丸みを帯びた天井部に宝珠つまみを有する。7は口径181mm。丸みを帯びた天井部から屈曲したのち垂下する。8は口径146mm。天井部からほぼ直線的に開き、屈曲したのち、短く内傾ぎみに垂下する。9は口径144mm。口縁部は大きく屈曲し、短く内傾ぎみに垂下する。10は器高43mm・口径123mm。口縁部は、天井部から緩やかに垂下し、口端部は尖りつつわずかに外に開く。

11は須恵器坏で、35-5区から出土した。口縁部は直線的に開く。

12～19は灰釉陶器碗で、底部のみの個体は碗か皿か器種の同定が難しい。12は35-3区SX08010、13・15・18は講堂東辺(SD08003)、14・19は講堂(SB08001)、16・17は講堂南辺(SD08004)か

ら出土した。12は底径89mm、13は底径86mmで、内面に灰釉がハケヌリされ、外縁が接地する角高台を有する。14は底径70mm。胎土が橙褐色を呈し、幅の広いやや丸みを帯びた高台を有する。内面には三叉トチンの痕跡をとどめる。15底径98mm。三日月高台を有する。16底径72mm。外面に稜が残るやや高い高台を有する。17～19は低い高台を有する。17は底径77mmで、内面が硯に転用されていると考えられる。18は底径76mm、19は底径66mm。

20は鉄釘で、講堂南辺(SD08004)から出土した。器長160mm・器幅11mmで、断面はほぼ正方形である。

21～23は軒丸瓦である。21は講堂南辺(SD08004)から出土したⅡA02型式である。瓦当面前程に大きな範傷が進行している。22は35-3区SD08026から出土したⅡA03型式である。瓦当には積上技法による痕跡が残る。23は講堂東辺(SD08003)から出土したⅡG01型式。瓦当は53mmと分厚く、胎土には砂礫を多く含み、焼成は軟質である。講堂東面の瓦積において瓦当面を外側へ向けて配置された軒丸瓦も当資料と同一型式である。

24～34は軒平瓦である。24・27は講堂南辺(SD08004)、25・28は同じく東辺(SD08003)、26は35-11区、29・31・32は講堂北辺(SD08002)、30は35-5区SD08012、31は35-5区サブトレンチ16、34はSK08015出土である。24～26はⅡB01型式である。当型式は25のように瓦当面前左隅に特徴的な範傷を有する例が多いが、24は範傷が進行する以前の製品である。27はⅡB02型式。23・24次調査の際に講堂北西隅において出土した5点の落下瓦は当型式であった。28・29はⅡB04型式。30はⅡA01型式。平城宮跡6719A型式と同範であることが知られている。31・32は型式未設定の資料。31は飛雲文と思われる。32はかなり退化した唐草文を有し、胎土や焼成は軒丸瓦ⅡG01型式(23)に類似する。33は重廓文で、ⅠA01型式。直線顎である。34は同じく重廓文で、ⅠA04型式。曲線顎である。30・33・34はいずれも伊勢国府で多用される瓦である。

35～49は文字押印瓦である。35・39・41・47は講堂南辺(SD08004)、36はSK08015、37はSX08010、38は35-6区SD08009、40は35-3区、42は35-6区SD08006、43・48は講堂東辺(SD08003)、44は35-4区SX08033、45は35-4区SD08009、46は講堂(35-1区)、49は35-9区出土である。うち35～43は丸瓦、44～49は平瓦であ

る。35はI A05, 36はI A26, 37はI C12, 38・39はII A05, 44・47はI A18, 45はI A08, 46はI A12, 48はI C03, 49はII A03である。36には粘土板の接合痕が残る。37は成形前に押印されたもので、印文が丸瓦の短軸方向に延びる。43は今回初めて出土したもので、「工」に見えるが単なる記号かもしれない。焼成・胎土が軒丸瓦II G01に類似する。III D01型式と称することにする。49は国分寺のみに認められる型式で、凹面狭端中央から50mm奥に押印される。

50・51は平瓦であるが、凸面に成型台に由来すると見られる圧痕を有するものである。50は35-3区、51は講堂南面(SD08004)出土。50は狭端側に方形陽刻状の痕跡が残る、51は広端側に方形陽刻状及び逆T字形陰刻状の痕跡が重なる。いずれも凸面に離砂が付着する。伊勢国府政庁で多く使用される平瓦である。

52は35-3区SD08024(小院内溝)出土の鬼瓦である。下部と鼻が欠損する。型作りによる。伊勢国府跡の北方官衙で多く出土している。

V まとめ

1 講堂

講堂では南・北面を中心に延石状に並ぶ塼が検出され、東・西・南面からは瓦列が検出された。瓦列には一部塼も混在することから、瓦塼列とすべきであるが、本書では略して瓦列と称している。南面の塼列には2か所の突出部分があり、階段基礎と判断された。地上にほとんど遺構を留めない伊勢国分寺跡にあっては最も保存状態の良いことが改めて確認された。

使用されている塼は断面台形の塼で、他に例を見ない特異な建築資材である。古くは、鈴木敏雄氏により示され、石田茂作氏による集成にも唯一「梯形」との註記があるものである。その使用法の推定には、回廊の金堂接続部分における2段目の残存例(24次)や講堂北面における検出例(23・24次)が参照されてきた。いずれにおいても1段目については下底面を外側に向けている。回廊において検出された2段目は1段目と逆方向、すなわち基壇側を向くことが注目された。

今回の調査では講堂北面において塼積が2段検出され、3段目の可能性がある転落例も見出された。基本的には下底面を全て基壇外側に向け、間知石状に組むのが原則と思われる。東・南・北面で検出された塼

列は、地中部分にあたるためか風化も少なく良好に保存されてきた。北面での検出例から2段の塼積が廻っていたことは确实と考えられ、転落例の存在からは3段の可能性をも想定することができる。

東・西・南面で検出された瓦列は、丸瓦・平瓦を主体としたもので、長軸端や短軸端を外側に揃えて設置されている。中には軒瓦の瓦当面を外側に向けて配置された部分もある。塼列と瓦列の両者が見られるのは東面と南面であるが、それぞれ両者の平面的な位置関係が異なる。南面では塼列よりも0.1～0.2mほど内側に瓦列が位置するのに対し、東面では塼列の直上に瓦列が位置する。北東隅では塼列の0.3m内側にさらに塼が配置されている。また23・24次調査では、塼列に一部掛かるようにして軒先から落下したと思われる瓦が検出されている。

これまでの調査で明らかとなった講堂における基壇外装は、創建後に修造が繰り返された結果、やがて維持が困難となり、ついには廃絶された際の最終的な状況を反映しているものと理解される。基壇南面から大量の瓦類に混じって出土した灰釉陶器は、廃絶時期を考える上で参考になるものである。

それでは具体的にどのような基壇外装が考えられ、どのような変遷を辿ったのであろうか。廃絶後の状況も含め、時間軸を遡りながら考えてみたい。

講堂跡には伊勢国分寺跡において唯一寺院を思わせる「堂跡」という小字が残ることから、伊勢国分寺跡を象徴する場所として認識されてきたものと考えられる。周囲よりも一段高いこの場所には昭和35年並びに大正11年の史跡標柱が建てられている。萱生由章が明和8年(1771)『常慶山國分寺縁起』に国分寺跡として記した場所も「堂跡」を中心とする地域であった。基壇東辺に建つ廻国碑は寛保3年(1743)の銘を有する。おそらく国分寺の礎石を再利用したものであろう。伊勢国における近世六十六部聖の巡拝社寺については田代孝氏によれば朝熊岳金剛証寺や山田世義寺などがあげられているほか(田代2003)、三木治子氏が紹介した宝暦6年(1756)の五霞村実相院石塔では「勢州薬師如来都波岐宮」とあり(三木1996)、国分寺並びに一宮が廻国行者の参拝地となっていた。下って天保4年(1833)刊の『勢陽五鈴遺響』には常慶山国分寺の項に「六十余州同国ノ行者納経所トス」とある。講堂跡が廻国碑の建立場所に選ばれたのは江戸時代中期において国分寺の旧跡として認識されていたために他ならない。ただし、法華経納経という点から法華滅罪之寺である国分尼寺との関連が説か

れることも注目される（五来 1994）。いずれにせよ、廻国碑の存在から江戸中期には講堂基壇が現在とほぼ同じ遺存状況にあったことが覗い知れ、講堂跡を中心に国分寺跡としての認識が象徴的に残るのは、広大な伽藍の中で講堂のみが最後まで法灯を保ち得た証かもしれない。

中世に遡ると基壇の状況を示す考古資料や史料は見当たらない。先述のとおり、講堂の維持が困難になった時期は、講堂南面から出土した灰釉陶器（Plate13 No.16）が参考となる。したがって、中世の段階ですでに廃墟となっていた可能性が高いと考えられ、僧坊や北東院付近に国分寺との関連が乏しいと思われる掘立柱建物が検出されている。中世における伊勢国分寺そのものの文献記録は知られていないが、国分寺領については建久3年（1192）の山辺御園内に見られ（仲見編 1980）、徳治3年（1308）には法勝寺領として伊勢国分寺の記載がある（奥野 1956・阿部 1986）。

講堂の維持修繕が停止したと思われる平安中期頃の状況は、検出された遺構に直接反映されているものと考えられる。東・西面の基壇外装は瓦積で、北面は2段目の台形塼が部分的に残存していた。東・西面の状況からすれば、瓦積基壇であったと想定されるが、北東隅における内側の塼列の状況や南面における塼列と瓦列との位置関係からは二重基壇の可能性も考えられる。二重基壇とした場合、南面と東面とでは瓦塼列の意味が異なってくる。つまり南面の瓦列は下成基壇上面における化粧面で、塼列の直上に同じく台形塼が外装材として積まれていたと想定され、東面では瓦塼列そのものが側面に表れていたと考えなければならない。また、南面における瓦列と塼列は厳密に見れば、平行しておらず、瓦列を下成基壇の裏込めと見ることにはやや難がある。したがって維持修繕が停止したときの講堂基壇は北面など一部を除き瓦積基壇で、南面の塼列は瓦積基壇外装の基底部として機能していなかったとみるべきかもしれない。

南面から検出された2か所の階段部分は中央並びに東階段に相当し、本来は南面に3か所の階段が設けられていたと想定される。いずれも基礎部分のみが残存し、その残存状況から土製階段に塼などで外装を施したものと考えられる。東階段の西辺や中央階段の西辺には、破損品が混在することから、外装材の損傷・欠落に伴って規模を減じ、最終的に幅1.95～2.05mほどの階段が中央と東に残存したものと推定できる。最終段階において講堂基壇本体及び階段は長年にわたる修造の末、統一感を欠いた状況であったとみなさざ

るをえない。

建物及び基壇の経年変化に伴う修造は随時行われたものと思われ、ときには大修理が実施されることもあったであろう。基壇周囲の雨落溝に相当する部分は、溝状の大きな落ち込みとなっており、多くの瓦片が含まれていた。建物修理に際しては、基壇の補修・瓦の葺直し・内外壁の修復などに新たな土の採掘が必要となるとともに、破損瓦などの処理が伴うと想像される。基壇周りの落込みは、新たな建築資材の採取と廃材処理を兼ねたものと理解される。

大規模な修造を想起させる記録としては、宝亀6年（775）の異常風雨や大同4年（809）の志摩国分二寺僧尼安置が知られる。宝亀6年の災害は伊勢・尾張・美濃で百姓300人余を漂没し、国分並びに諸寺の塔19を損壊せしめるなどその被害は甚大であった。大同4年の組織改編も自然災害に匹敵する大改修の要因になりうるかもしれない。東面の瓦積に使用されている軒丸瓦Ⅱ G01型式（Plate13 No.23）や類似の胎土・焼成を示す型式未設定の軒平瓦（Plate15 No.32）などは大規模な修造に際し、新たに製作された瓦であると考えられる。

創建期の講堂基壇の様子を知るには、修理により変更が加えられた要素を取り除き考えなければならない。講堂基壇南面及び北面の塼列や南面東階段の東辺部分に残る塼列は創建期の構造を伝えるものと考えられる。階段幅も当初は対応する柱間程度の幅であったと思われる。また、23・24次調査で検出された落下瓦から軒丸瓦Ⅱ A02型式と軒平瓦Ⅱ B02型式が創建瓦と想定された。階段については、塼列の状態から基壇本体の外装工事が終了したのち付加されたものと考えられる。北面に認められるように全周に2段ないしは3段の台形塼が積まれていたとして、さらにその上部がどのような形状になっていたかが問題となる。

基壇の高さを知る材料は非常に乏しく、礎石・根石はもちろんのことそれらの抜き取り痕跡さえ見出せない。塼列上面を基準にすると、サブトレンチ18では基壇上面における遺構面までの高さが0.3mとなる。そこからさらに礎石・根石の高さ0.5mほどを加えて、低くとも0.8mほどの基壇が想定できる。塼の下底面の幅は概ね12cmなので、全て台形塼で積み上げると6個は必要となる。果たして奥行きが9cmほどの塼を間知石状に6個も積み上げることが可能であろうか。先述のとおり、修造期における二重基壇の可能性を検討した。当初の基壇が台形塼を用いた塼積基壇である

とすれば、創建期こそ二重基壇であった可能性が考えられる。わずかに出土している板状の方形磚は、基壇上面の縁辺部に使用されていたと考えられよう。残念ながら、調査では創建期における基壇外装の手がかりはほとんど得られなかったため、現有資料を基に今後検討を深めることとしたい。

建物規模の推定はさらに困難を極めるが、基壇規模と南面東階段の東辺部分が柱通りに一致すると想定して、おおよその推定は可能である。すなわち、桁行・梁行方向ともに基壇の出を11尺とし、7間×4間の建物を想定すると、桁行を12+13+13+14+13+13+12尺、梁行を12+13+13+12尺に割り振ることができる。

講堂基壇の直下からは6・7世紀のものと思われる竪穴住居が過去の調査で検出されており、国分寺建立以前の状況を示す材料も得られている。

2 小院・北東院

小院・北東院ともに築地塀による区画と考えられ、北東院については、先行する土坑の出土遺物から9世紀初頭以降の造営年代が与えられている。北東院の内部には食堂と推定される時期不明の大型建物（以下北東建物とする）が存在するが、院と北東建物の中軸線は一致しない。むしろ北東院の南に隣接して確認された小院と北東建物が中軸線を共有している。今回の調査は、史跡整備の際の表示方法に鑑み、小院と北東院における時期差の有無や両者の性格を確認するために実施したものである。

北東院の築地に伴うとされる溝は今回の調査においても確認され、その敷設時期については過去の調査と同様に先行する土坑との切り合い関係が確認された。35-4区におけるSK08014～08016で、それらの埋没時期から判断される北東院の造営時期は従来の見解を支持するものである。

小院と北東院の切り合い関係については35-3区東半部分において確認され、小院東辺の内溝SD08024が北東院南辺の外溝SD08026に切られていることがわかった。SD08024からは伊勢国府からもたらされたと考えられる文字瓦や鬼瓦が出土した。小院内部にはさらに不連続の溝SD08018・08038・08019が、31次調査のSD0289・05019とともにほぼ正方形にめぐることが確認された。深さ・幅ともに一定せず、北辺のSD08038はほとんど痕跡状となっている。溝の芯々で一辺約27m、内法で26mほどとなるこれらの溝は小院と関連の深い遺構と考えて良いであろうし、小院そのものが北東院と切り合い関係を持つこと

が明らかとなったのは最大の成果であった。ただし西辺における両者の重なり具合や小院の北限は明らかにできなかった。西辺築地においては北東院が小院を踏襲している部分があったのかもしれない。

問題は小院内における方形溝状遺構の機能である。類似した遺構を古代の事例に探ると、伊勢国府跡の北方官衙や西院で検出された建物周囲の溝に求めることができる。伊勢国分寺跡の講堂・金堂周囲の溝も同様のものであろう。いずれも雨落溝の位置に設けられた瓦片を含む溝状の落ち込みである。雨落溝とするには深さが一定せず、建物が機能していたときにはある程度埋没していたと考えざるをえない場合もある。前項でも触れたとおり、土の採取と瓦の廃棄を兼ねた遺構とみなすのが合理的と考えられる。その上部は位置的に雨落溝となるが多かったと思われるが、耕作等により失われているのがふつうである。建物の存続時期が長ければ、修理の度に掘削・埋戻しが繰り返され、講堂や金堂周囲のように規模の大きな溝となると予想される。こうした溝が基壇建物のまわりに存在するのは、修造時において基壇もしくは建物補修用の土採取と廃材処理を建物直近で済ませた結果に他ならない。創建当初における基壇築成用の土はしかるべき場所から搬入されたと想定され、最初から基壇周囲を掘削するようなことは寺院・官衙など格式の高い建物においては考えにくい。伊勢国府政庁の正殿や後殿は大規模な修造を経ることなく、廃された建物と考えられ、基壇周囲にこのような溝状の落ち込みが形成されることはなかった。小院内の方形溝状遺構がこうした基壇建物周囲に見られる溝状遺構と同様のものであるとすれば、想定される建物の存続期間は講堂や金堂ほど長期にわたるものではなかったことが予想される。

以上のような建物に関連すると見られる方形溝状遺構を内部に有する小院はいかなる性格の施設であろうか。小院の東西規模は、かつて考察された伊勢国分寺の造営規格である36尺方眼の4区画分に近似し、小院の中軸は金堂の中軸から同じく約7区画分に相当するため、伊勢国分寺に属する重要施設であることは疑いないであろう。

小院の性格については31次調査において(1)布施院・(2)国師院・(3)その他施設増築の3案が示された。(1)は浮橋・布施屋・渡船などを東海・東山道の要衝に設け、講読師・国司に検校を命じた承和2年(835)6月29日太政官符に具体例を見ることができる。国分寺が慈善救済の役割を担うことがあった(追塩1987)。この官符では美濃尾張両国堺の墨俣河左右辺

に布施屋二処を設けるものであるが、こうした例が一般化できるならば、国分寺に布施院が設けられることも十分考えられる。国分寺の南方には、鈴鹿川の左岸段丘上に「船着き」に由来すると伝えられる舟塚古墳がある。国分寺の立地場所が河川からやや距離はあるものの検討の余地はある。ただし、時期的にはむしろ北東院との関連を考えるべきかもしれない。さらには施業・救護という観点からすれば尼寺との関連も無視できない。

(2)の国師院については、金堂と並列して想定される例が知られず、比較材料がない。国司院は安芸国分寺における調査研究で、僧坊北東に想定され、伊勢では北東建物に対応するものとする事ができる。延暦14年(795)における国師制から講師・読師制への制度改革が国分寺における施設の改編を伴った可能性を考えれば、こちらも北東院の新設に関連を求めべきかもしれない。いずれにしても国師(講師)院があるとすれば僧寺ということになる。

(3)の増築という説は、今回の切合関係により否定されたが、その他の施設としては大衆院も考えられる。大衆院については、『法隆寺伽藍縁起并流記資材帳』ならびに『大安寺伽藍縁起并流記資材帳』の検討から伽藍に含まれるとの見解が示されている(川尻2001)。国分寺における寺院運営施設の空間構成(山路2009)と比較したとき、金堂と並列する小院よりは北東院の方がふさわしいと思われる。

結局、北東院については様々な比較材料があるのに対し、小院については手掛かりが少ないといわざるを得ない。小院内部には建物の存在を示す掘込地業や柱穴などは今回の調査でも発見されなかった。したがって小院の性格を遺構から実証できる材料は極めて乏しいのが現状である。

小院及びその内部の方形溝状遺構の形状や位置関係に最も近いと考えられる国分寺関連の施設としては塔院があげられる。塔院を有する国分寺には陸奥・山城・河内・近江(甲賀寺)・肥後などが知られ、その区画施設としては、陸奥のごとく回廊の場合と山城・河内などのように築地塀が想定される場合とがある(須田2008)。延喜式にいうところの上国である山城を除いては、すべて大国に位置づけられることから、国の等級・規模に応じて伽藍の格式が異なっていた可能性もある。小院内方形溝状遺構の内部にもし塔基壇を配するとすれば、美濃や上野など最大級の国分寺塔基壇でも周囲に3m以上の余地を残して収まることになる。伊勢の場合は、内部に建物の存在を示す証拠が見つ

らず、これ以上の比較検討は困難といえる。

II章で紹介したとおり、伊勢国分寺が所在する国分町字堂跡付近には塔心礎を思わせる奇岩「師子取石」の記録があり、鈴木敏雄氏による昭和11年(1936)の報告では「師子取石」も含め、礎石の多くがすでに見られなくなっていたという。鈴鹿市内には昭和初期に国分寺跡から運ばれたとされる礎石の伝聞も残り、今後は史跡外における探究も必要と思われる。

参考文献

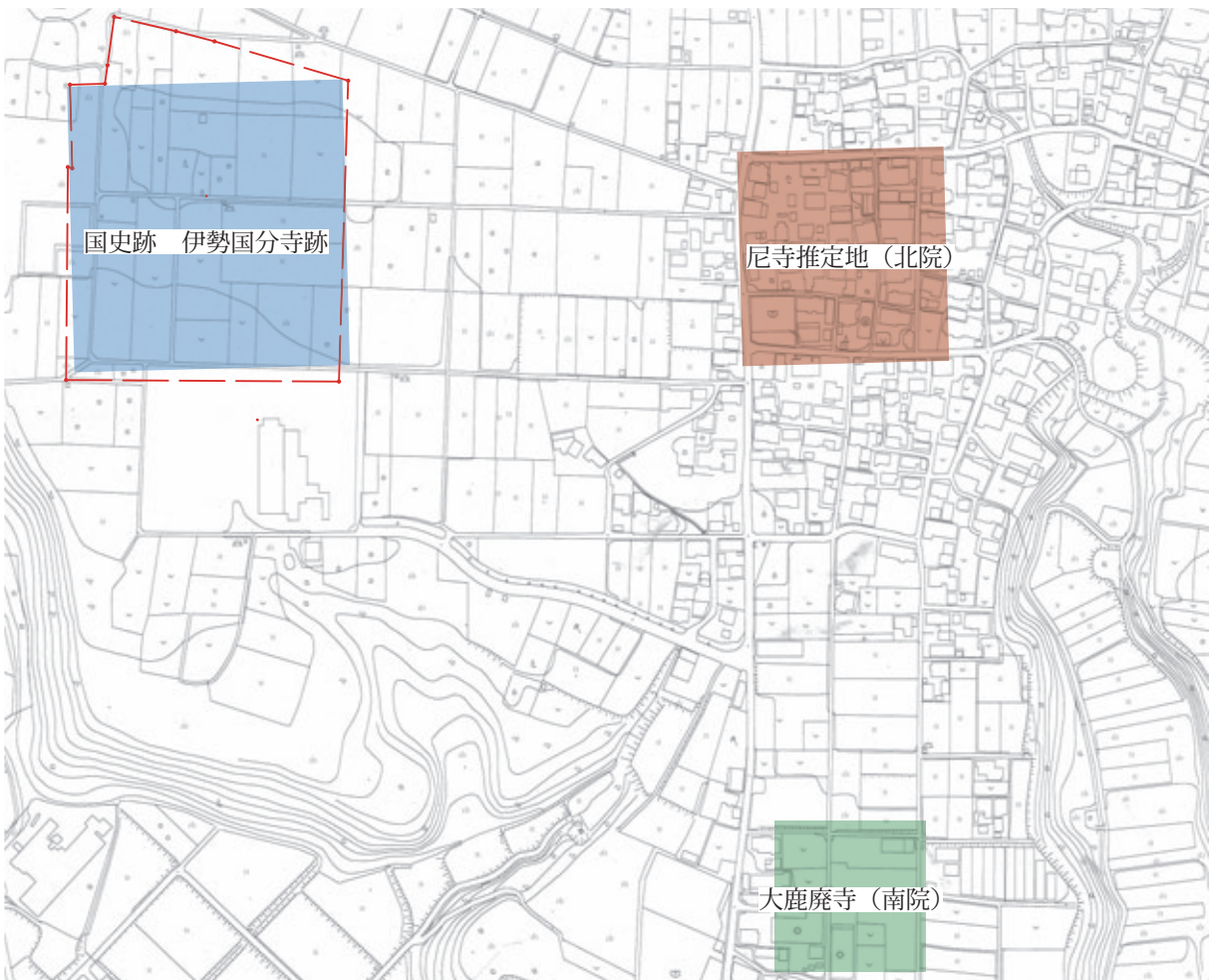
- 荒井秀規 1994「武蔵国分寺、その機能をめぐって」『渡来人と仏教信仰 武蔵寺内廃寺をめぐって』(柳田敏司・森田悌編) 雄山閣出版
- 青木和夫・稲岡耕二・笹山晴生・白藤禮幸校注 1995『新日本古典文学大系続日本紀四』岩波書店
- 阿部猛 1986「六勝寺領考」『帝京史学』第2号
- 石田茂作 1966『東大寺と国分寺』(日本歴史新書増補版) 至文堂
- 追塩千尋 1987「国分寺の展開」『古代史研究の最前線』第4巻文化編 雄山閣出版
- 大森孤舟 1979『三重県風土史蹟』歴史図書社(初版大正5年刊)
- 岡田登 1995「伊勢大鹿氏について上・下」『史料』一三五・一三六号 皇学館大学史料編纂所
- 奥野高廣 1956「六勝寺領について」『國學院雑誌』57巻7号
- 川尻秋生 2001「資材帳からみた伽藍と大衆院・政所」『古代』第110号
- 倉野憲司校注 1963『古事記』岩波文庫
- 黒板勝美編 1936『新訂増補國史大系第25巻類聚三代格・弘仁格抄』吉川弘文館
- 黒板勝美編 1964『新訂増補國史大系第32巻吾妻鏡』吉川弘文館
- 黒板伸夫・森田悌編 2003『訳注日本史料日本後紀』集英社
- 五来重 1994「六十六部」『日本史大事典第六巻』平凡社
- 小玉道明 2006『考古の社会史 伊賀・伊勢・志摩・東紀州考古記録』光出版
- 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋 1995『日本書紀(四)』岩波文庫
- 佐竹昭 2008「国分寺と国師」『シンポジウム国分寺の創建を読むI』国土館大学
- 佐藤虎雄 1938「伊勢國分寺」『國分寺の研究』考古學研究会
- 佐藤虎雄 1991「伊勢」『新修国分寺の研究第2巻畿内と東海道』吉川弘文館
- 鈴鹿市教育委員会 1990『伊勢国分寺跡—第2次発掘調査概要』
- 鈴鹿市教育委員会 1991『伊勢国分寺跡—第3次発掘調査概要報告—』
- 鈴鹿市教育委員会 1992『伊勢国分寺跡—尼寺跡推定地の調査—』
- 鈴鹿市教育委員会 1993『伊勢国分寺跡(5次)・長者屋敷遺跡(1次)』
- 鈴鹿市教育委員会 1994『伊勢国分寺・国府跡—長者屋敷遺跡ほか発掘調査事業報告』
- 鈴鹿市教育委員会 1995『伊勢国分寺・国府跡2』
- 鈴鹿市教育委員会 1996『伊勢国分寺・国府跡3』
- 鈴鹿市教育委員会 1997『伊勢国分寺・国府跡4』
- 鈴鹿市教育委員会 2002『伊勢国分寺跡1』
- 鈴鹿市教育委員会 2002『伊勢国分寺跡2』

- 鈴鹿市教育委員会 2003 『伊勢国分寺跡 3』
- 鈴鹿市教育委員会 2004 『伊勢国分寺跡 4』
- 鈴鹿市考古博物館 2005 『伊勢国分寺跡 5』
- 鈴鹿市考古博物館 2006 『伊勢国分寺跡 6』
- 鈴木敏雄 1933 『三重縣古瓦圖録』 楽山文庫
- 鈴木敏雄 1936 「史蹟伊勢國分寺址」『三重縣における主務大臣指定史蹟名勝天然記念物』第1冊史蹟 三重県
- 須田勉 2008 「国分寺と七重塔」『シンポジウム国分寺の創建を読むⅠ』 国土館大学
- 田代孝 2003 「六十六部回国納経の発生と展開」『巡礼論集 2 六十六部廻国巡礼の諸相』 岩田書店
- 藤堂元甫（上野市古文献刊行会編）1987 『定本三國地志』（宝暦 13 年完成）
- 虎尾俊哉編 2000 『訳注日本史料延喜式上』 集英社
- 虎尾俊哉編 2007 『訳注日本史料延喜式中』 集英社
- 仲見秀雄編 1980 『鈴鹿市史』第 1 巻 鈴鹿市教育委員会
- 箱崎和久 2004 「東大寺七重塔考」『東大寺創建前後』（ザ・グレートブツダシンポジウム論集第 2 号） 東大寺
- 箱崎和久 2008 「七重塔の構造と意匠」『シンポジウム国分寺の創建を
読むⅡ』 国土館大学
- 藤原秀樹 2009 「伊勢国分寺跡」『第 12 回考古学研究会東海例会—東海地方における国分寺の造営—』
- 安岡親毅（倉田正邦校訂）1976 『勢陽五鈴遺響』 三重県郷土資料刊行会（天保 4 年刊）
- 山田安在（倉田正邦校訂）1972 『伊勢国誌』 三重県郷土資料刊行会（天明年間完成）
- 山中為綱（鈴木敏雄・野田精一校訂）1968 『勢陽雜記』（明暦元年初稿・同 2 年補訂） 三重県郷土資料刊行会
- 御巫清直（神宮司序編輯）1936 「伊勢式内神社檢録」『神宮神事考証後篇御巫清直全集大神宮叢書』（明治 11 年完成）
- 三木治子 1996 「六十六部の石塔（二）」『歴史考古学』 38 号
- 宮内黙藏 1974 『伊勢名勝志』 三重県郷土資料刊行会（初版明治 22 年刊）
- 山路直充 2001 「国分寺における寺院地と伽藍地（上）」『古代』 第 110 号
- 山路直充 2008 「国分寺の空間構成」『シンポジウム国分寺の創建を読むⅠ』 国土館大学
- 山路直充 2009 「コメント—おもに寺の空間について—」『第 12 回考古学研究会東海例会—東海地方における国分寺の造営—』

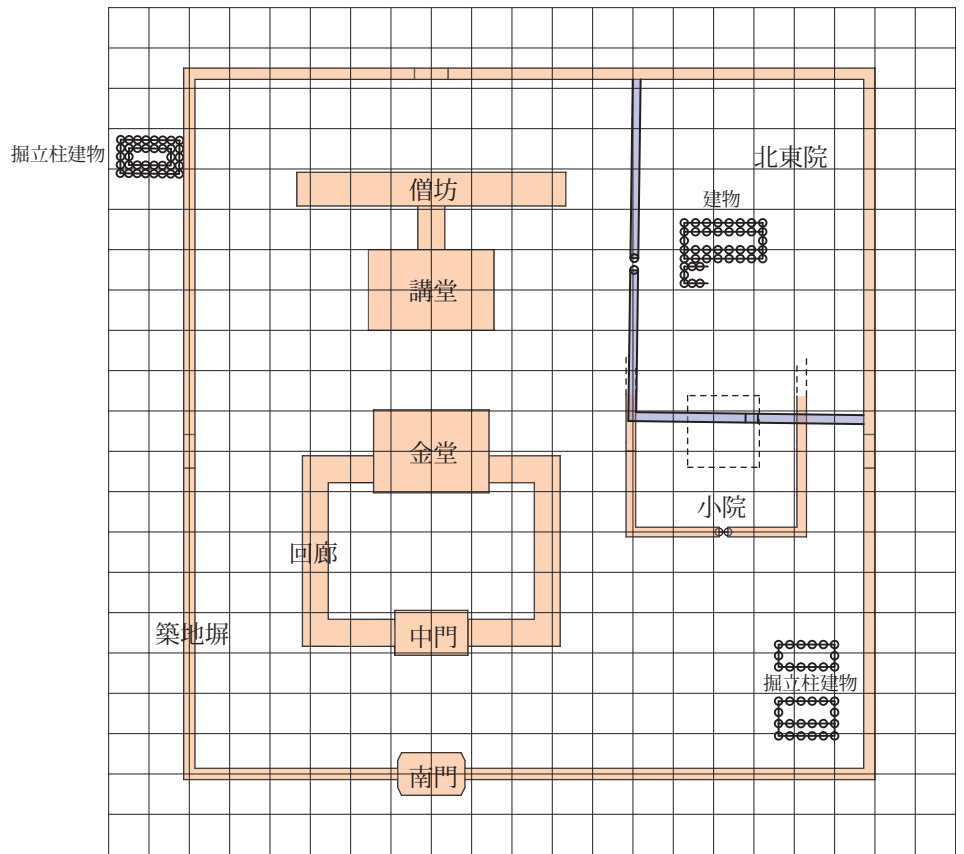
图 版



関連遺跡位置図 1:200,000 (国土地理院 20 万分の 1 地勢図「名古屋」を使用)

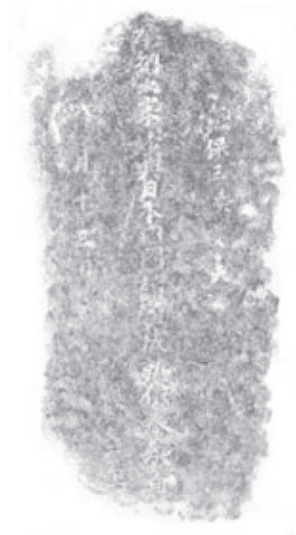


伊勢国分寺跡周辺図 1:5,000



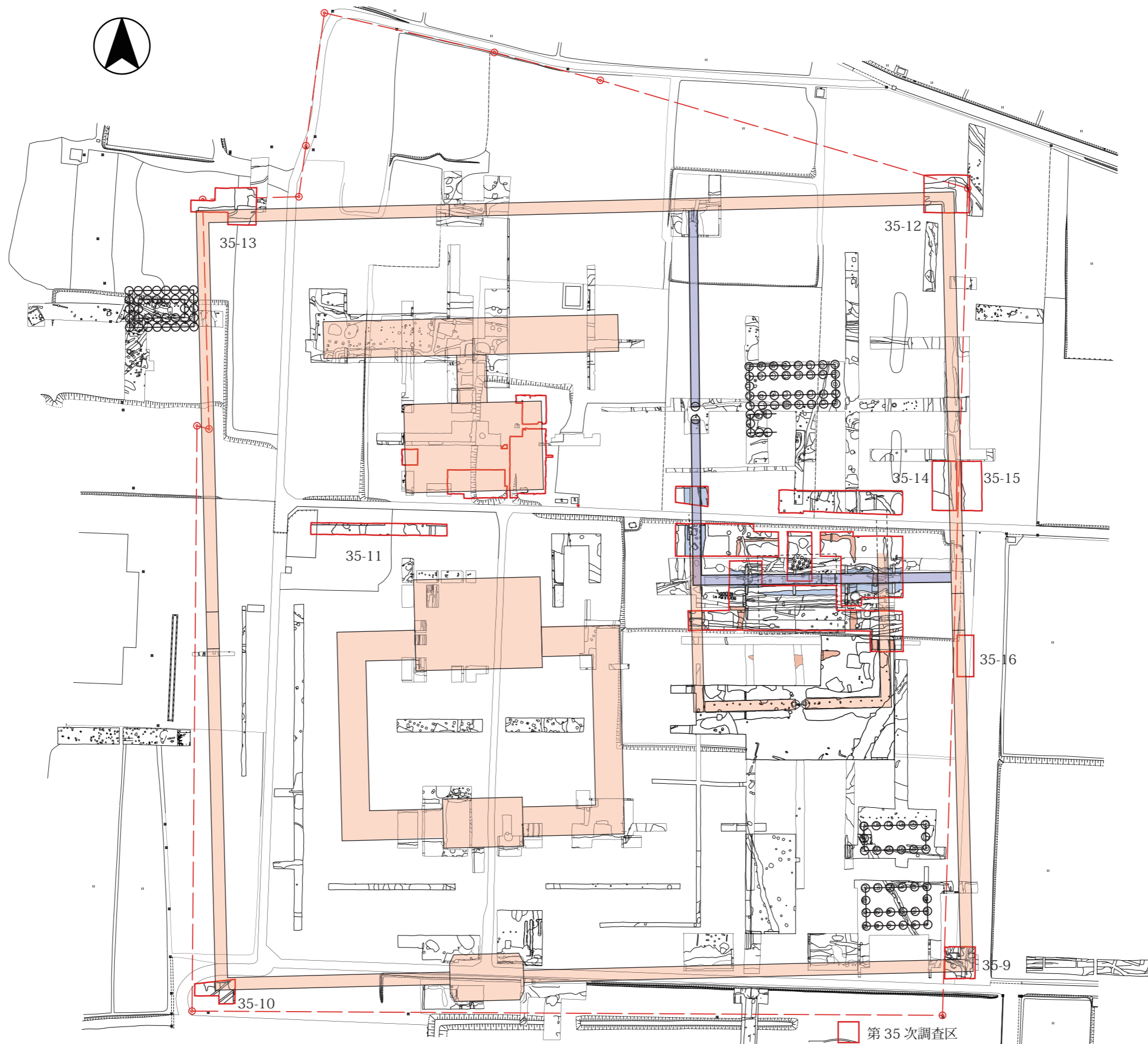
(36 尺方眼)

伊勢国分寺跡伽藍配置図 1:2,000



0 0.5 m

廻国碑拓影 1:10



伊勢国分寺跡平面図 1:1,000

第 35 次調査区

Y = 51759
X = -121204

Y = 51795

Plate4



SD08030

SB08001

SD08002

SD08003

SD08025

SX08005

SD08004

X = -121231

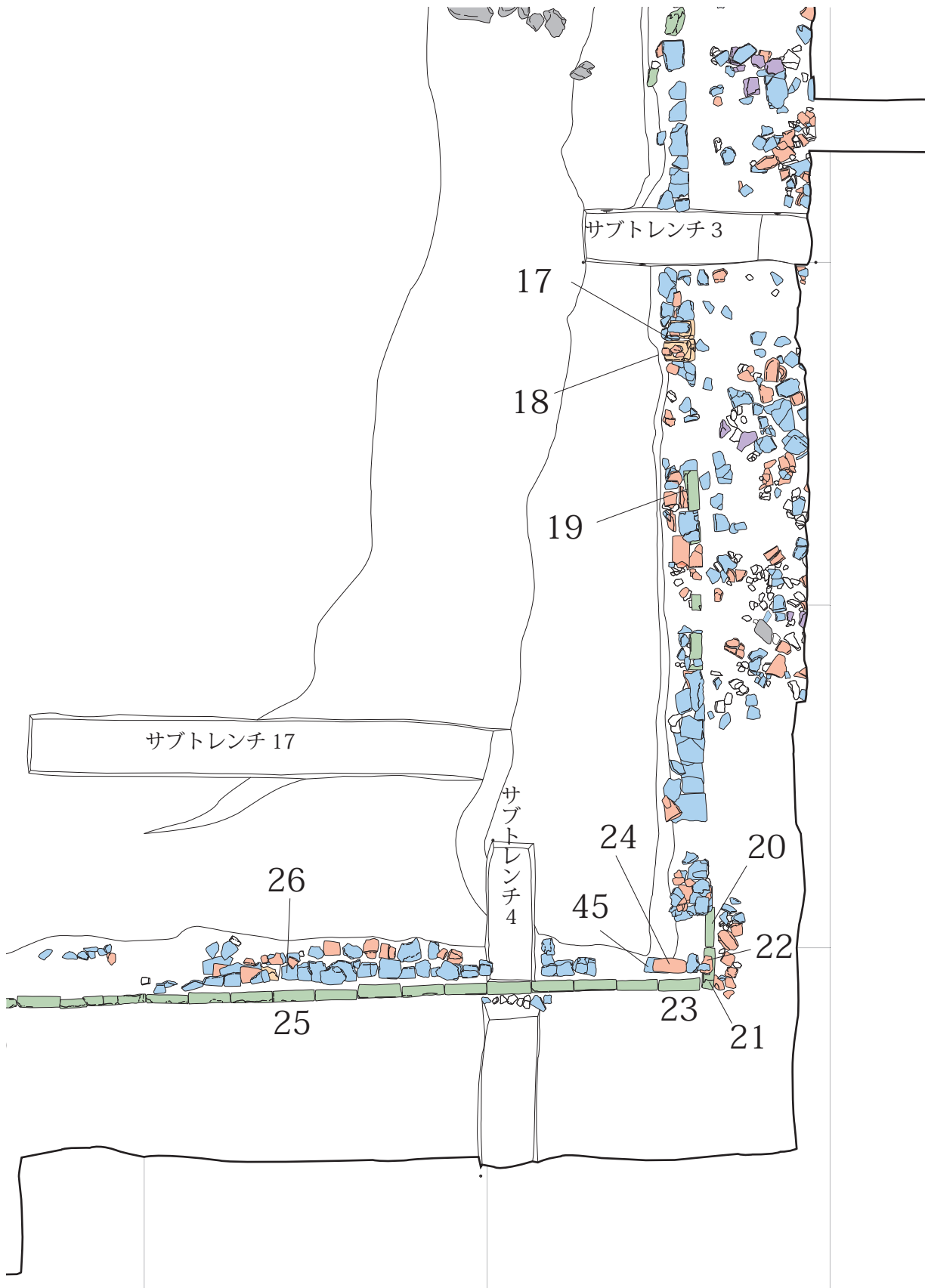
0

30m

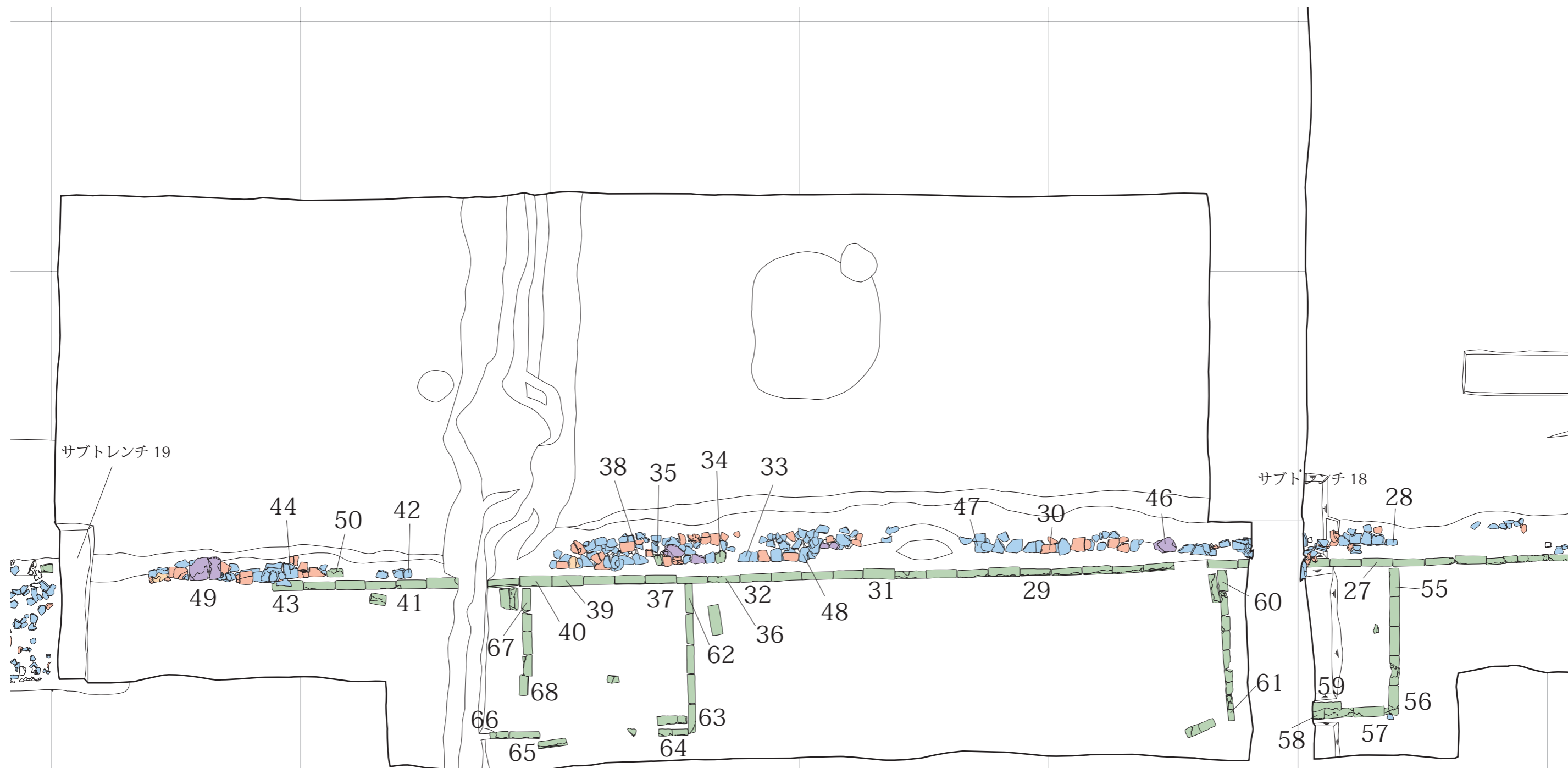
講堂平面図 1:100



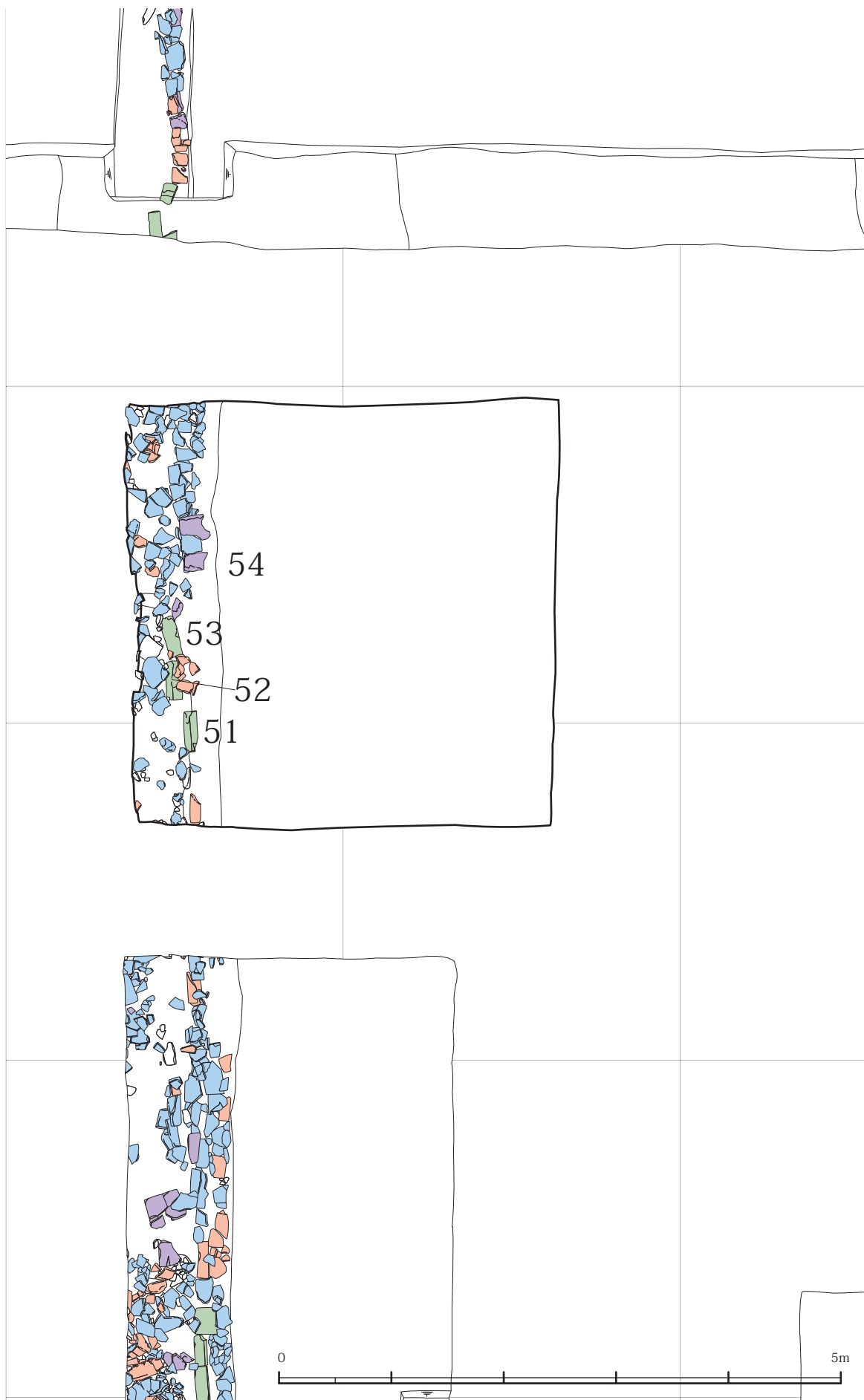
講堂瓦塼出土状況図（北・東辺） 1:50



講堂瓦埴出土状況図（東・南辺） 1:50

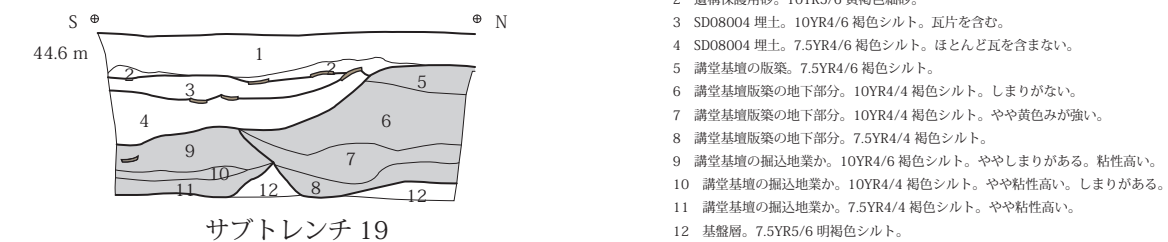
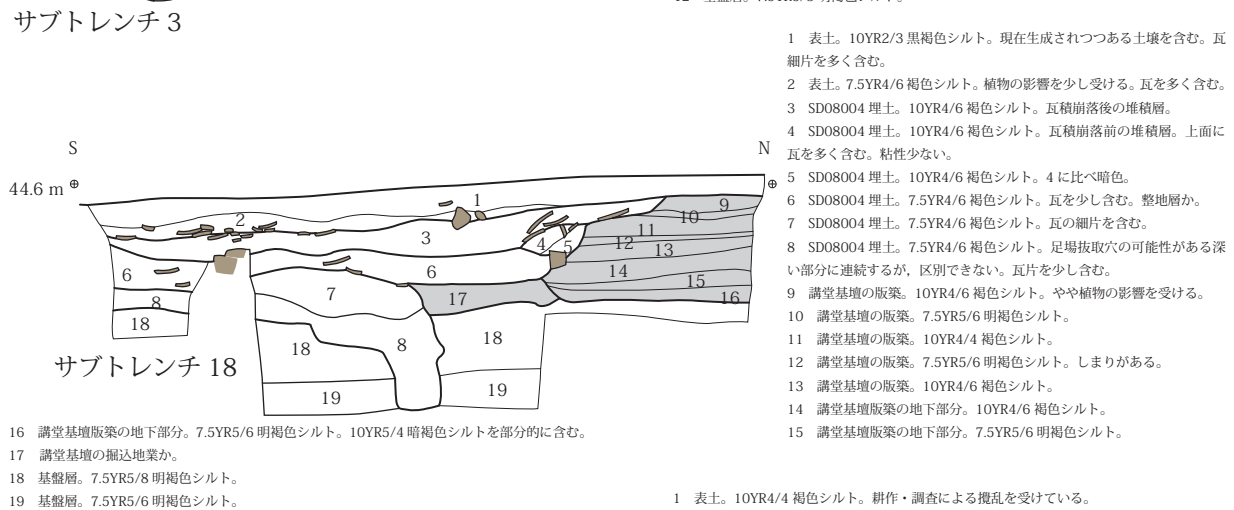
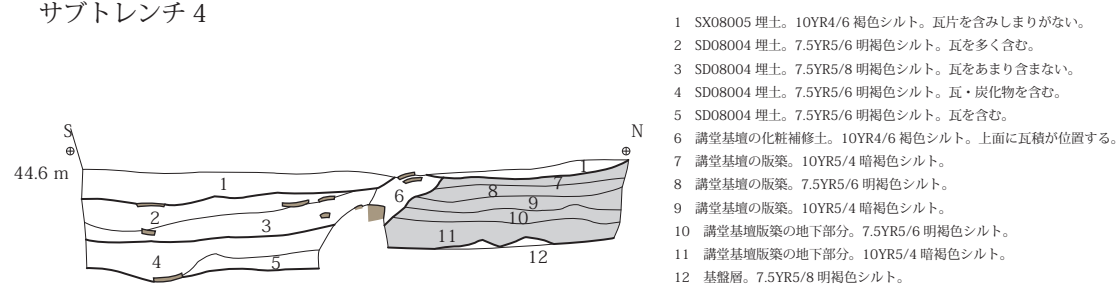
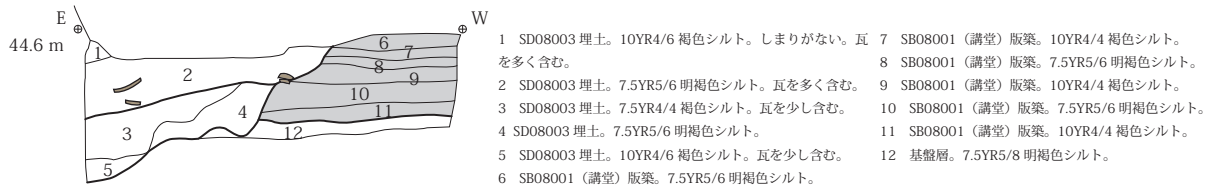
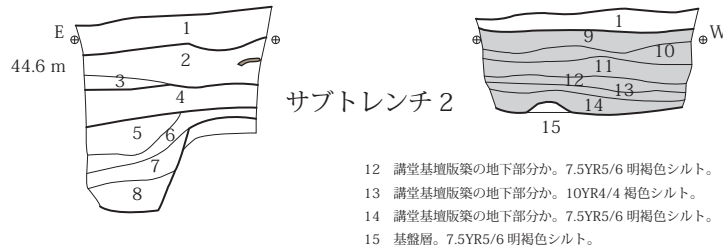
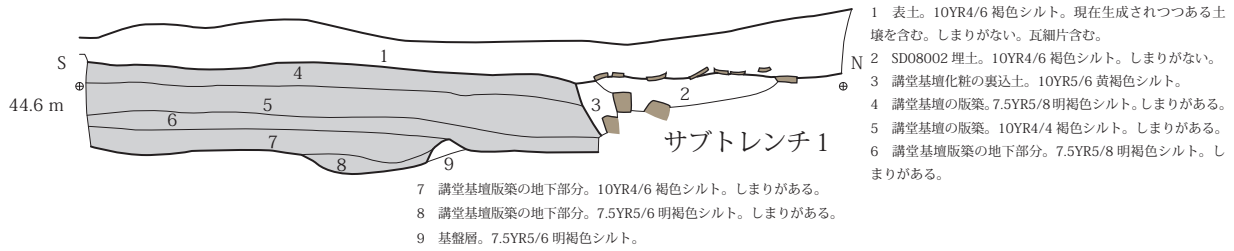


講堂瓦埴出土状況図 (南辺) 1:50



講堂瓦埴出土状況図（西辺） 1:50

Plate9



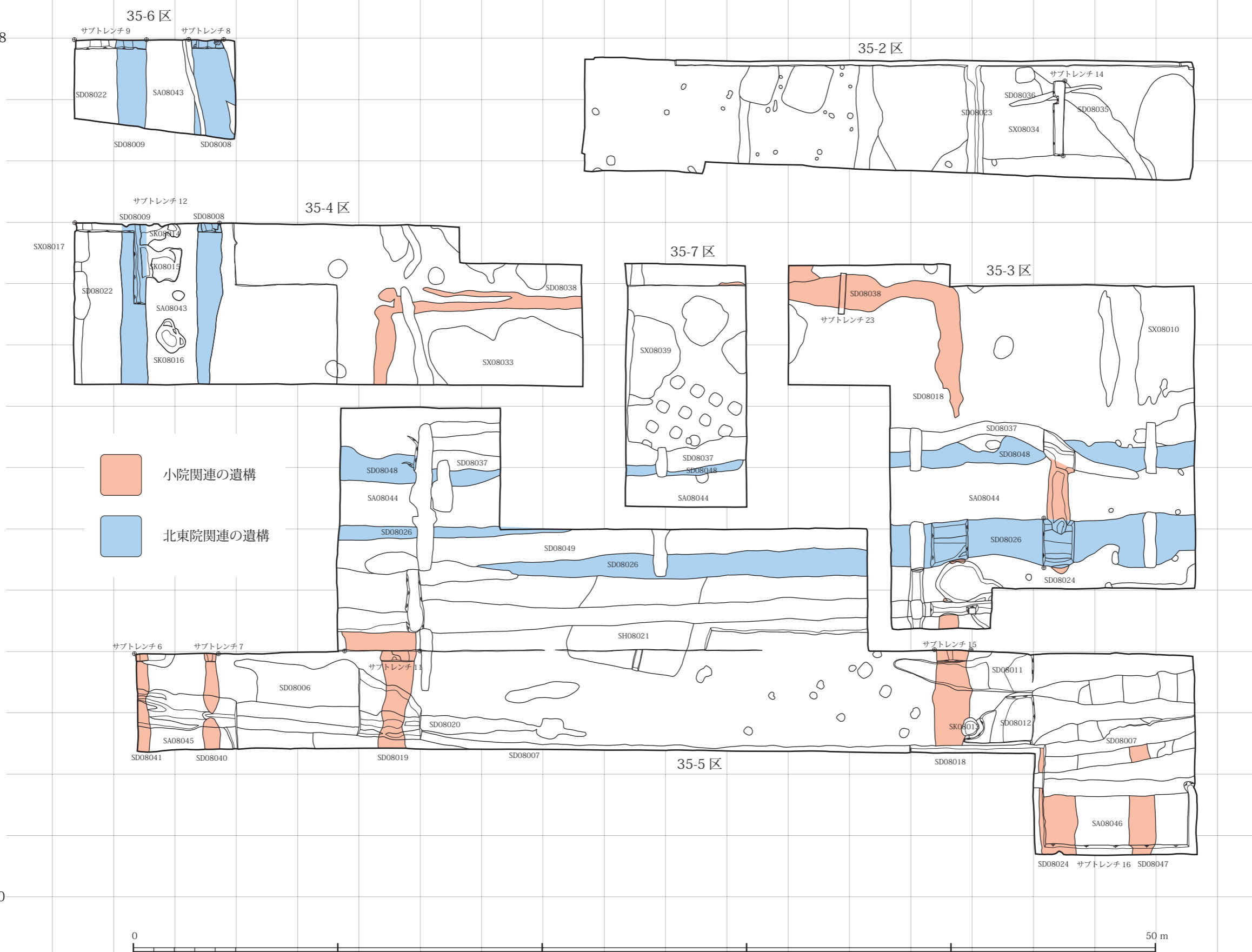
講堂土層断面図 1 : 40

Y = 51825

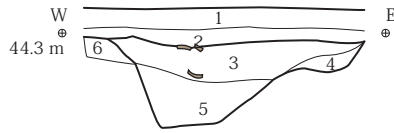
Y = 51882

X = - 121228

X = - 121270

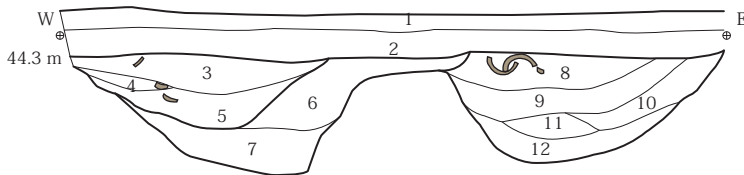


小院・北東院平面図 1:200



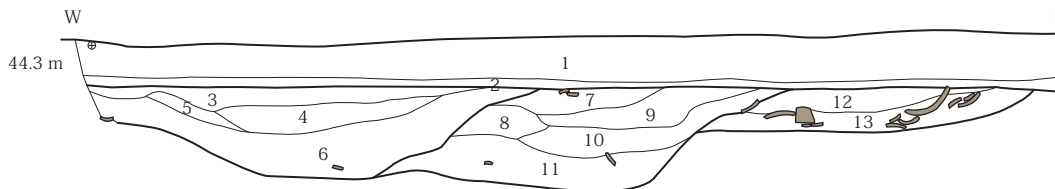
35-6 区サブトレンチ 8

- 1 表土 (耕作土)。10YR4/4 褐色シルト。
- 2 旧水田床土。10YR5/4 暗褐色シルト。
- 3 SD08008 埋土。10YR4/6 褐色シルト。瓦片をやや多く含む。
- 4 SD08008 埋土。7.5YR5/6 明褐色シルト。瓦含まない。
- 5 SD08008 埋土。7.5YR4/4 褐色シルト。瓦含まない。ややしまりがある。
- 6 基盤層。7.5YR5/6 明褐色シルト。



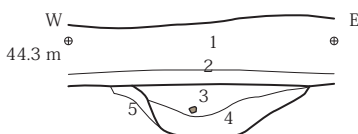
35-6 区サブトレンチ 9

- 1 表土 (耕作土)。10YR4/4 褐色シルト。
- 2 旧水田床土。10YR5/4 暗褐色シルト。
- 3 SD08022 埋土上層。10YR4/6 褐色シルト。瓦細片をわずかに含む。ややしまりがない。
- 4 SD08022 埋土上層。10YR5/4 暗褐色シルト。瓦細片をわずかに含む。ややしまりがない。
- 5 SD08022 埋土上層。10YR4/6 褐色シルト。瓦細片をわずかに含む。ややしまりがない。
- 6 SD08022 埋土下層。7.5YR5/6 明褐色シルト。瓦含まない。
- 7 SD08022 埋土下層。7.5YR5/6 明褐色シルト。瓦含まない。しまりがある。
- 8 SD08009 埋土。7.5YR4/6 褐色シルト。大きな瓦片を多く含む。
- 9 SD08009 埋土。10YR4/6 褐色シルト。瓦細片をわずかに含む。
- 10 SD08009 埋土。7.5YR4/6 褐色シルト。瓦含まない。暗色。
- 11 SD08009 埋土。7.5YR5/6 明褐色シルト。瓦細片をわずかに含む。明色。
- 12 SD08009 埋土。7.5YR4/4 褐色シルト。瓦含まない。暗色。10YR5/8 黄褐色シルトの径 80mm ブロックを含む。ややしまりがある。



35-4 区サブトレンチ 12

- 1 表土 (耕作土)。10YR4/4 褐色シルト。
- 2 旧水田床土。10YR5/4 にぶい黄褐色シルト。マンガン粒多く含む。瓦細片含む。しまりがある。
- 3 SD08022 埋土。10YR5/4 にぶい黄褐色シルト。瓦片少ない。
- 4 SD08022 埋土。10YR4/6 褐色シルト。瓦片少ない。黒っぽい炭化物わずかに含む。
- 5 SD08022 埋土。10YR4/4 褐色シルト。瓦片少ない。
- 6 SD08022 埋土。10YR4/6 褐色シルト。瓦片少し含む。
- 7 SD08009 埋土。10YR4/4 褐色シルト。大きな瓦片を含む。
- 8 SD08009 埋土。7.5YR5/6 明褐色シルト。瓦片含む。黄色味が強い。
- 9 SD08009 埋土。10YR4/6 褐色シルト。瓦片少ない。
- 10 SD08009 埋土。10YR4/6 褐色シルト。瓦片含む。暗色。
- 11 SD08009 埋土。7.5YR4/4 褐色シルト。瓦片少し含む。ややしまりがある。
- 12 SK08014 埋土。10YR4/6 褐色シルト。瓦片少し含む。
- 13 SK08014 埋土。10YR4/4 褐色シルト。上面に瓦を多く含む。

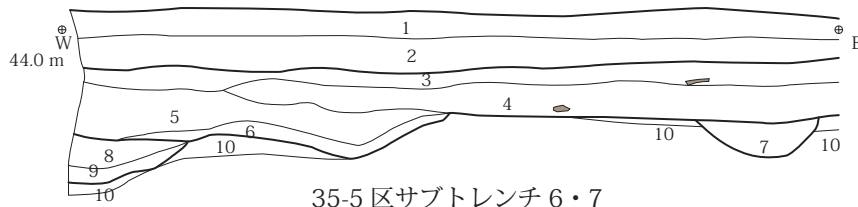


35-4 区サブトレンチ 12

- 1 表土 (耕作土)。10YR4/4 褐色シルト。
- 2 旧水田床土。10YR5/4 にぶい黄褐色シルト。マンガン粒多く含む。瓦細片含む。しまりがある。
- 3 SD08008 埋土。7.5YR4/6 褐色シルト。瓦片多く含む。
- 4 SD08008 埋土。7.5YR5/6 明褐色シルト。瓦片含まない。暗色。
- 5 基盤層。7.5YR5/6 明褐色シルト。



Plate12



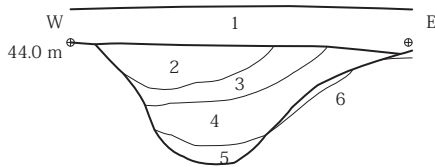
35-5 区サブプロファイル 6・7

- | | |
|--|------------------------------------|
| 1 耕作土。10YR4/4 褐色シルト。 | 6 SD08006 埋土。10YR4/6 褐色シルト。しまりが無い。 |
| 2 耕作土 (床土)。10YR4/4 褐色シルト。上面に MnO ₂ ・FeO ₂ が多く沈着する。 | 7 SD08040 埋土。7.5YR4/6 褐色シルト。瓦片を含む。 |
| 3 SD08006 埋土。10YR4/4 褐色シルト。ややしまりが無い。 | 8 SD08041 埋土。10YR4/6 褐色シルト。やや粘性高い。 |
| 4 SD08006 埋土。10YR4/6 褐色シルト。瓦片が混入する。 | 9 SD08041 埋土。10YR4/4 褐色シルト。しまりがある。 |
| 5 SD08006 埋土。7.5YR5/6 明褐色シルト。 | 10 基盤層。7.5YR5/8 明褐色シルト。 |

- | |
|---|
| 1 SD08019 埋土。7.5YR5/6 明褐色シルト。上面に瓦を含む。しまりが無い。 |
| 2 SD08019 埋土。7.5YR5/6 明褐色シルト。わずかに瓦を含む。しまりが無い。 |
| 3 SD08019 埋土。10YR4/6 褐色シルト。わずかに瓦を含む。しまりが無い。 |
| 4 SD08019 埋土。7.5YR5/4 にぶい褐色シルト。瓦を含まない。しまりが無い。 |
| 5 基盤層。7.5YR5/8 明褐色シルト。 |



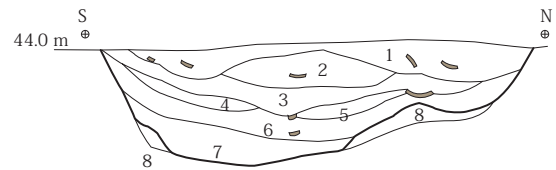
35-5 区サブプロファイル 11



35-5 区サブプロファイル 15

- | |
|--------------------------------------|
| 1 表土 (耕作土)。10YR4/4 褐色シルト。 |
| 2 SD08018 埋土。10YR4/4 褐色シルト。 |
| 3 SD08018 埋土。10YR4/4 褐色シルト。瓦を多く含む。 |
| 4 SD08018 埋土。7.5YR4/4 褐色シルト。瓦を少し含む。 |
| 5 SD08018 埋土。7.5YR5/6 明褐色シルト。瓦を含まない。 |
| 6 基盤層。7.5YR5/8 明褐色シルト。 |

- | |
|---|
| 1 SD08006 埋土。10YR4/6 褐色シルト。瓦を多く含む。 |
| 2 SD08006 埋土。7.5YR4/6 褐色シルト。 |
| 3 SD08006 埋土。10YR4/6 褐色シルト。下面に瓦を多く含む。 |
| 4 SD08006 埋土。7.5YR5/6 明褐色シルト。瓦の細片をわずかに含む。 |
| 5 SD08006 埋土。7.5YR5/6 明褐色シルト。瓦の細片をわずかに含む。 |
| 6 SD08006 埋土。7.5YR5/6 明褐色シルト。瓦を少し含む。しまりがある。 |
| 7 SD08006 埋土。7.5YR5/6 明褐色シルト。やや粘性高い。 |
| 8 基盤層。7.5YR5/8 明褐色シルト。 |



35-3 区 SD08026

- | |
|---|
| 1 SD08036 埋土。10YR3/4 にぶい黄褐色シルト。ややしまりが無い。土器・瓦細片含む。 |
| 2 SD08035 埋土。7.5YR4/4 褐色シルト。ややしまりが無い。径 2-3cm の礫を少し含む。瓦細片少し含む。 |
| 3 SD08035 埋土。7.5YR4/6 褐色シルト。しまりがある。粘性高い。遺物含まない。 |
| 4 SX08034 埋土。7.5YR5/6 明褐色シルト。瓦片を不均一に含む。 |
| 5 SX08034 埋土。7.5YR4/4 褐色シルト。土器・瓦片含む。 |
| 6 SX08034 埋土。7.5YR5/6 明褐色シルト。やや粘性高い。遺物含まない。 |
| 7 基盤層。7.5YR5/8 明褐色シルト。 |



35-2 区サブプロファイル 14



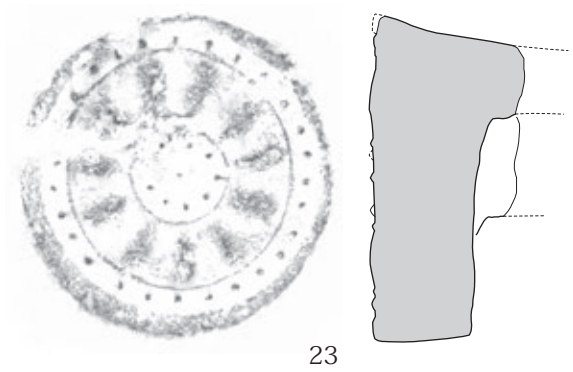
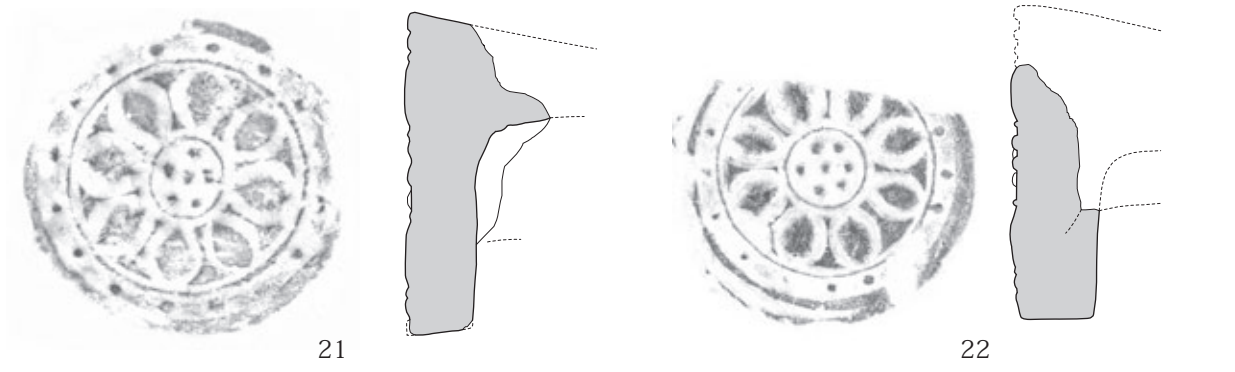
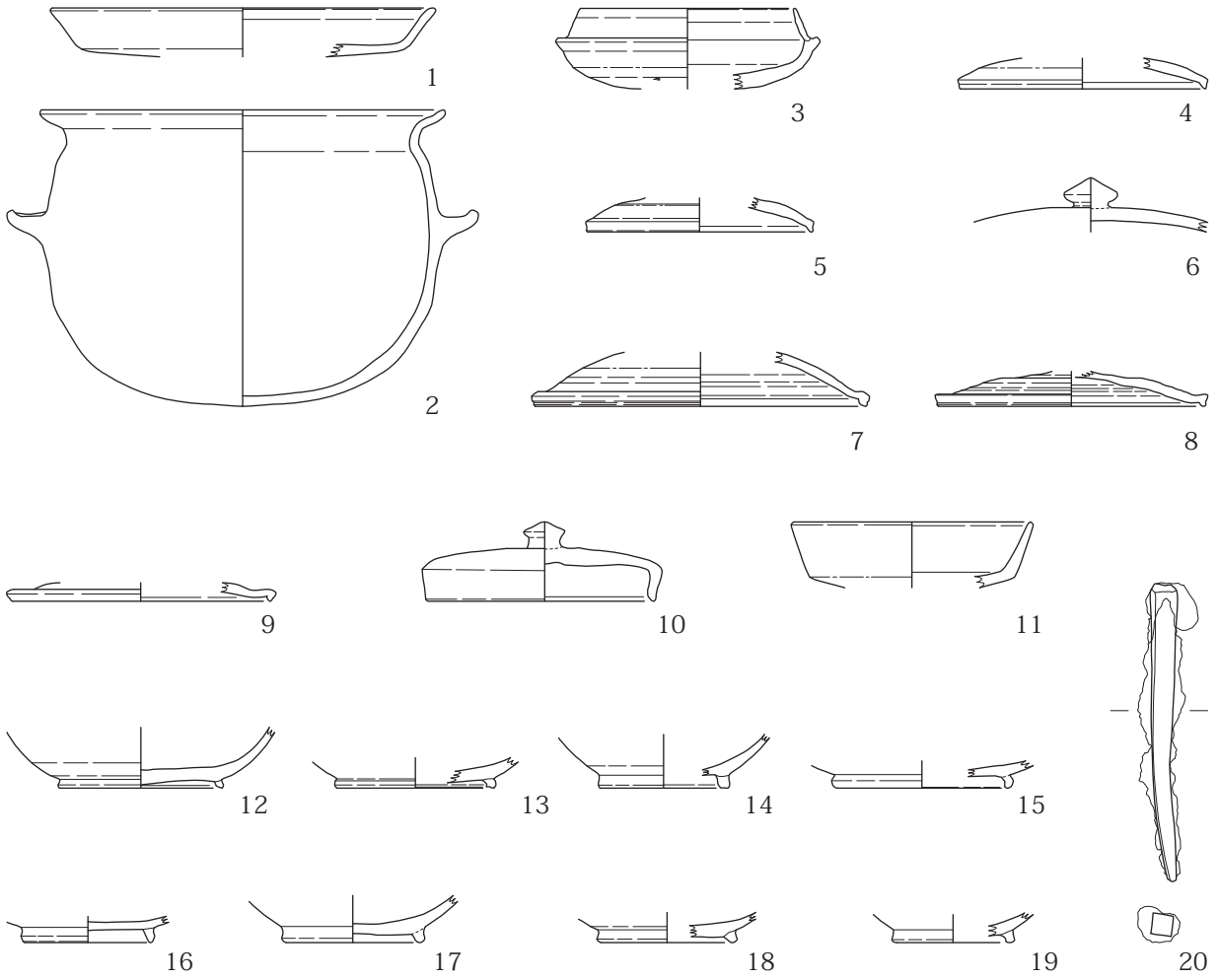
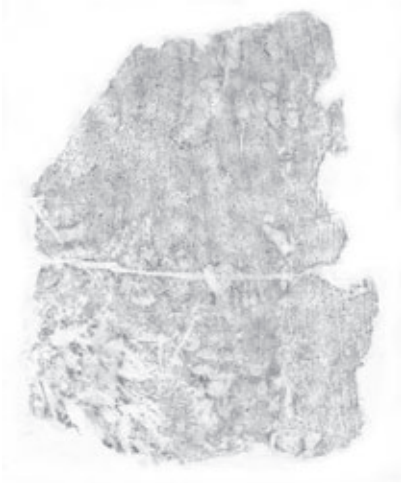


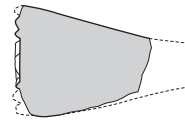
Plate14



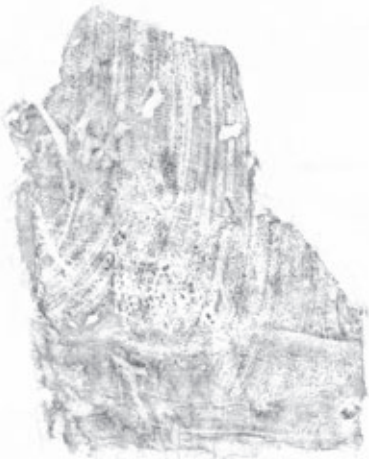
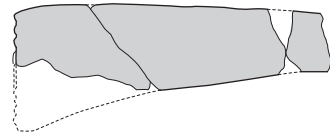
24



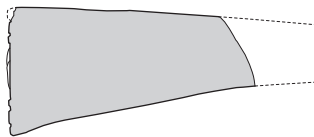
26



25



27





28



29



30

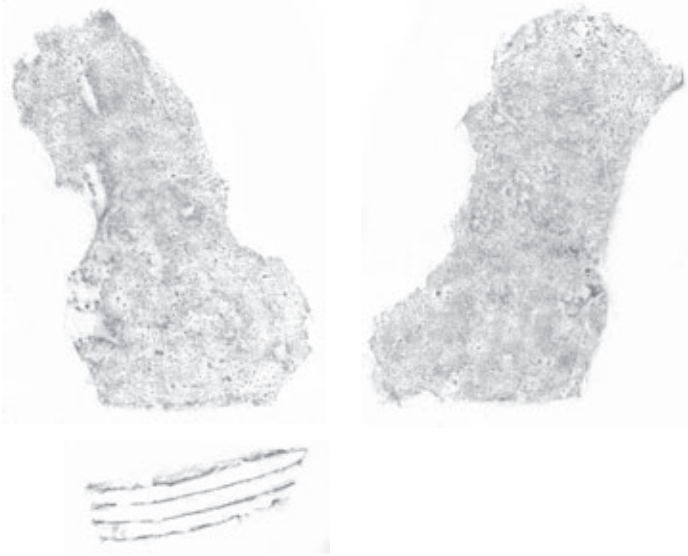


31

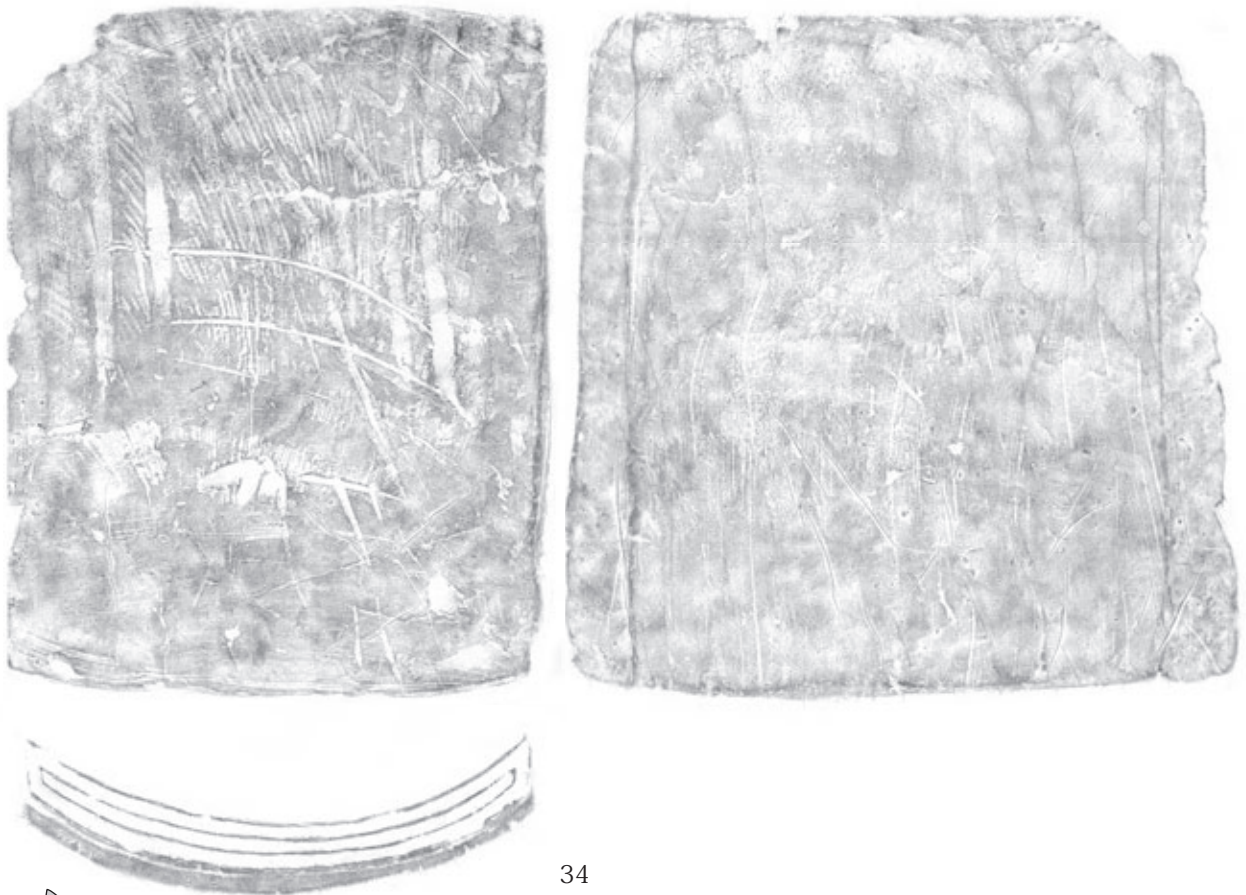


32

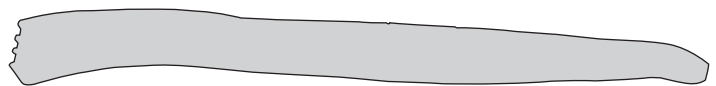




33



34

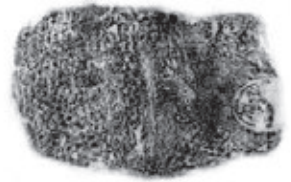
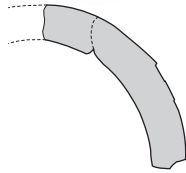




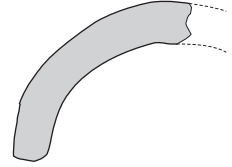
35



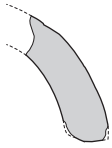
36



37



38



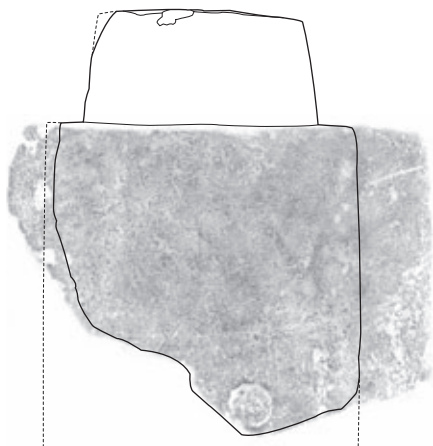
39



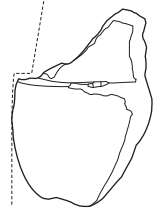
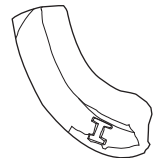
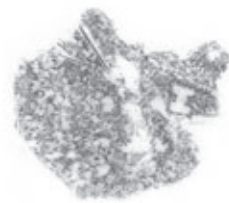
40



41

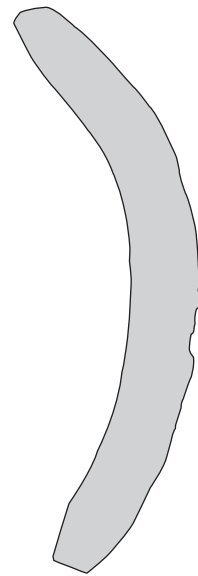


42



43

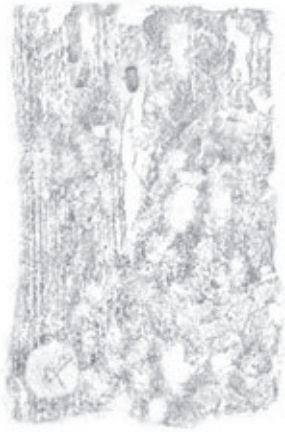




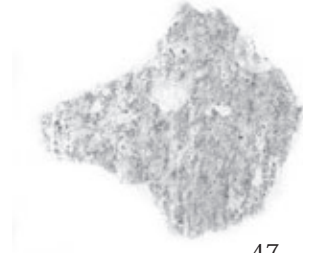
44



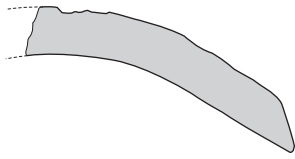
遺物実測図・拓影 (6) 1 : 4



46



47



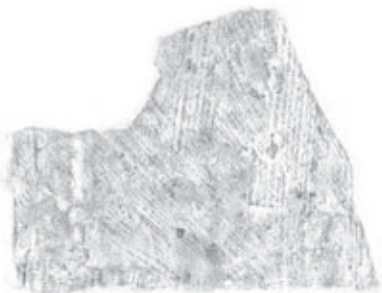
45



48



49

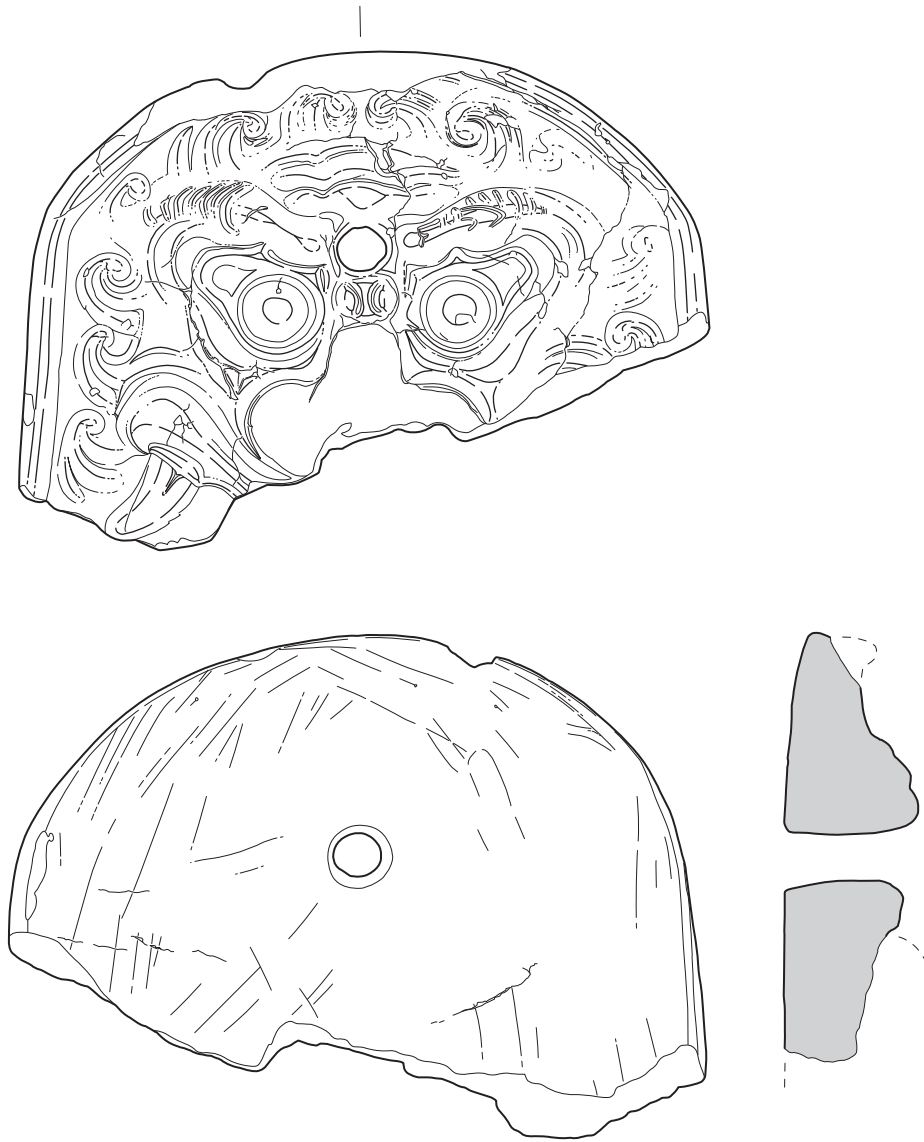


50



51





52



遺物実測図 1 : 4



講堂全景



講堂東半（南から）



講堂南面（東から）



講堂南東隅（南から）



講堂南面（南東から）



講堂南面東階段（北から）



講堂南面東階段（南東から）



講堂南面東階段（北から）



講堂南面中央階段（北から）



講堂南面中央階段（南東から）



講堂南面（南から）



講堂北東隅（東から）



講堂東面（東から）



35 - 2 ~ 7 区小院・北東院



講堂調査前全景（南東から）



講堂北面（南から）



講堂北面（北から）



講堂北面土層断面（南東から）



講堂北面（南から）



講堂北東隅（南から）



講堂北東隅（南西から）



講堂北東隅（北から）



講堂東面（北西から）



廻国碑（南から）



講堂南面土層断面（南東から）



講堂南面土層断面（東から）



講堂南面（南から）



講堂南面（東から）



講堂南面（東から）



礎石（東から）



講堂西面（西から）



講堂西面（西から）



35 - 5 区小院内西辺（北から）



35 - 5 区小院内溝東辺（北から）



35 - 5 区小院内溝西辺（北から）



35 - 4 区小院内溝北辺（北から）



35 - 3 区小院内東辺（北から）



35 - 3 区小院内東辺（東から）



35-2 区 (東から)



35-6 区北東院西辺 (東から)



35-9 区伽藍地南東隅 (北東から)



35-10 区伽藍地南西隅 (東から)



35-13 区伽藍地北西隅 (北東から)



35-12 区伽藍地北東隅 (南東から)

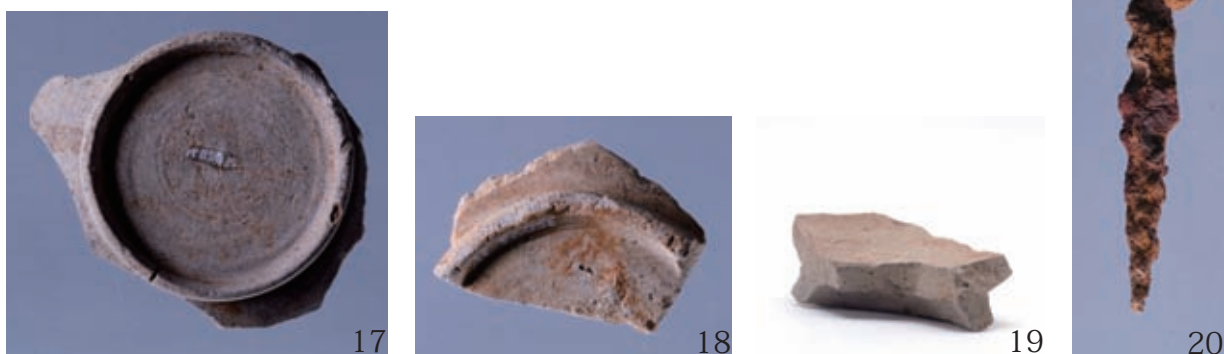


35-11 区 (東から)



35-14 区 (北西から)

Plate32



土師器・須恵器・灰釉陶器・釘



21



22



23



24



26



25



28



27



29

Plate34



30



31



32



33



34



35



35



36



36



37



37



38



38



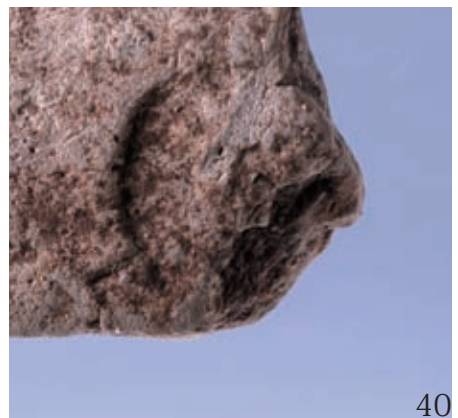
39



39



40



40

Plate36



文字瓦





49



49



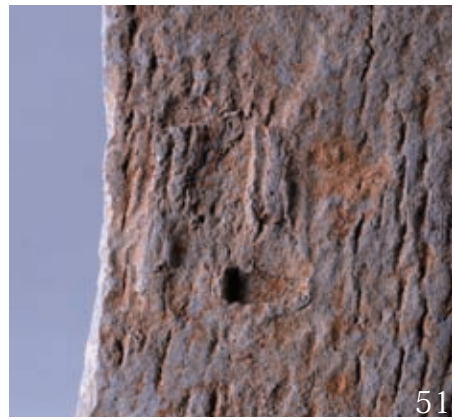
50



50



51



51



52



52

報告書抄録

ふりがな	いせこくぶんじあと							
書名	伊勢国分寺跡7							
編著者名	新田 剛							
編集機関	鈴鹿市考古博物館 (鈴鹿市文化振興部考古博物館)							
所在地	〒513-0013 三重県鈴鹿市国分町224番地 TEL 059 (374) 1994							
発行年月日	2009年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
伊勢国分寺跡	三重県鈴鹿市 国分町字堂跡 299番外	24207	361	34° 54′ 32″	136° 33′ 50″	2008年 7月14日 ～ 2009年 3月10日	2,082㎡	学術調査 史跡整備
	寺院	奈良・平安	礎石建物基 壇・溝・土坑・ 瓦溜	土師器・須恵器・ 灰釉陶器・丸瓦・ 平瓦・鬼瓦・埴・ 鉄釘	講堂基壇外周における延石状の 埴列及び瓦列, 同南辺の中央お よび東から階段基底部を確認。 伽藍地東半において北東院およ び小院を確認。			

伊勢国分寺跡7

発行日 2009年3月31日
 編集・発行 鈴鹿市考古博物館
 〒513-0013
 三重県鈴鹿市国分町224番地
 TEL059 (374) 1994
 FAX059 (374) 0986
 e-mail:kokohakubutsukan@city.suzuka.lg.jp
 URL:http://www.edu.city.suzuka.mie.jp/museum
 印刷 ㈱三ツ星

Ise Kokubun-ji Temple Site

Preliminary Report No.7



March, 2009

Suzuka Municipal Museum of Archaeology